ニナリキ
又（開目抄）曰
龍女ガ成佛此
レ一人ニハアラズ一切ノ女人ハ乃至擧一
例諸人ノ成佛ヲ顯ス
龍女ガ成佛ハ末代ノ女人ノ成佛往生ノ道ヲ
至今時ノ女人ノ成佛ノ時悲母レノ成佛ノ時惡人成佛ノ慈父ノ惡人成佛ノ顯ハルナフミアシケタルベシ
此ノ經ハ內典ノ孝經也
又（上野殿御消息）曰
レバ我等ガ母サ

用ひて法身を莊嚴せり、天人の戴仰する所、龍神も咸く恭敬す、一切衆生の類、宗奉せざる者無し、又聞きて菩提を成ずること唯佛のみ當に證知したまふべし、我大乘の敎を聞きて、苦の衆生を度脫せん、

爾の時に舍利弗、龍女に語りて言はく、汝久しからずして、無上道を得たりと謂へり。是の事信じ難し。所以は何ん。女身は垢穢にして、是法器に非ず。云何ぞ能く、無上菩提を得ん。佛道は縣曠なり。無量劫を經て、勤苦して行を積み、具さに諸度を修して、然して後に乃ち成ず。又女人の身には、猶五の障有り。一には梵天王と作ることを得ず。二には帝釋、

典ノ孝經也
又（上野殿御消息）曰
レバ我等ガ母サ
ハ但女人ノ體ニテコソ候ヘ畜生ニモアラズ蛇身ニモアラズ八才ノ龍女ニモ佛ニナル如何ゾ此經ノ力ニテ我母ノ佛ニナラザルベキ

三には魔王、四には轉輪聖王、五には佛身なり。云何ぞ女身速かに成佛することを得ん。

爾の時に龍女、一つの寶珠有り。價値三千大千世界なり。持以つて佛に上る。佛即ち之を受けたまふ。龍女、智積菩薩、尊者舍利弗に謂つて言はく、我寶珠を獻る。世尊の納受、是の事疾しや不や。答へて言はく、『甚だ疾し。』女の言はく。汝が神力を以つて、我が成佛を觀よ。復、此よりも速かならん。

當時の衆會、皆龍女の、忽然の間に變じて男子と成りて

中務卿宗良親王

わたつ海のあしまの涙をわけて來ても五のさはりなきぞ嬉しき

菩薩の行を具して、即ち南方無垢世界に往き、寶蓮華に坐して、等正覺を成じ、三十二相、八十種好ありて、普く十方の一切衆生の爲に、妙法を演說するを見る。

爾の時に娑婆世界の菩薩、聲聞、天龍八部、人と非人と皆遙かに彼の龍女の成佛して、普く時の會の、人天の爲に法を說くを見て、心大いに歡喜して、恭く遙かに敬禮す。無量の衆生、法を聞きて解悟し、不退轉を得、無量の衆生、道の記を受くることを得たり。無垢世界、六反に震動す。娑婆世界の三千の衆生、不退の地に住し、三千の衆生、菩提心を發して受記を得たり。智積菩薩、及び舍利弗、一切の衆會、默然として信受す。

第十三　勸持品（通論其四—第六回の授記）

解題　此の品は上の法師品と俱に、日蓮上人の確信をいやが上にも强からしめた根據の一であつて、最後の二十行の偈に、惡口罵詈等、及ビ刀杖ヲ加フル者、又は我レ身命ヲ愛セズ、但無上道ヲ惜ム、或は數々擯出セラレンなど、全く日蓮が爲に佛が記して置れたのであると迄力說されてある位である。

偖何故に勸持品といふ名を得たかといふに、寶塔品に陽に見え提婆品に陰に現れたる、末代弘通の五箇の鳳詔その鳳詔を當品に於て更に勸め遊ばして菩薩方に持たし

むるといふ一段であるから勸持の題目が出來たのである。

大筋——佛の重ねぐの御仰に、藥王菩薩及び大樂說菩薩等二萬の菩薩が皆佛前で末代弘經の誓を立てられる、又授記を得たる五百の羅漢、及び學無學の八千人は發誓するには、我等は到底此の娑婆世界の如き、惡人多き處では此の經の弘通は出來ぬが、他の國土で必ず弘通致します、と申上げる、其時に佛の養母、出家して摩訶波闍波提比丘尼といへるに一切衆生喜見如來、佛出家前の妃、出家して耶輸多羅比丘尼に具足千萬光相如來の授記を夫夫與へ給ふ、それで二大比丘尼は其弟子と俱に又他方の國土の法華弘通を誓はれる。

其時に佛が八十萬億の菩薩方を視まもり給ふので、菩薩達は弘經の命令が下るものと思ひ、坐より立つて佛前に至りて、若し我等に此經の弘通を御命じ下さるならば、我等は身命を賭して必ず佛勅を果しませうと申し上る、けれども佛は何故か默然として一向御命令遊ばさらないそこで再び佛前に誓言を發して此の土の弘經を希望される、それから有名な二十行の偈に移るのである。

一體此の品に於て特に注目すべきは、二大比丘尼の授記が提婆品の龍女成佛の次ぎに許された事である、普通なればモ少し早く授記があつて然るべきであるのに、今

頃になつて記別を見るのは、提婆品に說けるが如く、從來は女は五つの障があると定められて、絕對に成佛は許されなかつたのである、それ故に智積及大智舍利弗すら猶信ずることが出來ない位、これ方便不眞實の經なるが故である。そこで佛は龍女を假つて今迄の偏執を破り、女人と雖尙佛子たるに妨げないと眞實義を始めて現はされたのである、日蓮上人が龍女の成佛を評して、末代ノ女人ノ往生成佛ノ道ヲフミアケタルナリと云れてある。茲に於て一人の成佛が萬人の成佛を導いて、二大比丘尼の授記を見ることを得るに至つたのである。

妙法蓮華經勸持品第十三

爾の時に藥王菩薩摩訶薩、及び大樂說菩薩摩訶薩、二萬の菩薩眷屬と俱に、皆佛前に於いて、是の誓言を作さく、唯願はくば世尊、以つて慮したまふ爲からず。我等佛滅後に於いて、當に此の經典を奉持し、讀誦し、說きたてまつるべし。後の惡世の衆生は、善根轉た少くして、增上慢多く、利供養を貪り、不善根を增し、解脫を遠離せん。敎化すべきこと難しと雖も、我等當に大忍力を起して、此の經を讀誦し、持說し、書寫し、種種に供養して、身命を惜まざるべし。

異の國土、佗の國土、俱ニ娑婆世界ニアラザル別箇ノ世界ヲ云フ

憍曇彌　衆主ト譯シ波闍波提ノ別稱ナリ此ノ外、大生主、大愛道トモ云フ

爾の時に、衆中の五百の阿羅漢の受記を得たる者、佛に白して言さく、世尊、我等亦自ら誓願すらく、異の國土に於いて、廣く此の經を說かん。復、學無學の八千人の受記を得たる者有り、座より起ちて合掌し、佛に向ひたてまつりて、是の誓言を作さく、世尊、我等亦當に、佗の國土に於いて、廣く此の經を說くべし。所以は何ん。是の娑婆國の中は、人弊惡多く、增上慢を懷き、功德淺薄に、瞋濁諂曲にして、心不實なるが故なり。

爾の時に佛の姨母、摩訶波闍波提比丘尼、學無學の比丘尼六千人と俱に、座より起ちて一心に合掌し、尊顏を瞻仰して、目暫くも捨てず。時に世尊、憍曇彌に告げたまはく、何が故ぞ、憂の色をして如來を視る。汝が心に、將に我汝が名を說きて、阿耨多羅三藐三菩提の記を授けずと謂ふこと無しや。憍曇彌、我先に總じて一切の聲聞、皆已に授記すと說きぬ。今汝記を知らんと欲せば、將來の世に、當に六萬八千億の諸佛の法の中に於いて、大法師と爲るべし。及び六千の學無學の比丘尼も、俱に法師と爲らん。汝是の如く、漸漸に菩薩の道を具して、當に作佛することを得べし。一切衆生喜見如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號けん。憍曇彌、是の一切衆生喜見佛、及び

耶輸陀羅佛出家前ノ妃名聞、華色、等ト譯ス

六千の菩薩、轉次授記して、阿耨多羅三藐三菩提を得ん。

爾の時に、羅睺羅の母耶輸陀羅比丘尼、是の念を作さく、世尊、授記の中に於いて、獨我が名を說きたまはず。佛、耶輸陀羅に告げたまはく、

汝來世の、百千萬億の諸佛の法の中に於いて、菩薩の行を修し、大法師と爲り、漸く佛道を具して、善國の中に於いて、當に作佛すること得べし。具足千萬光相如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號けん。佛の壽、無量阿僧祇劫ならん。

爾の時に摩訶波闍波提比丘尼、及び耶輸陀羅比丘尼、幷びに其眷屬、皆大いに歡喜し、未曾有なることを得て、即ち佛前に於いて、偈を說きて言さく、世尊導師、天人を安穩ならしめたまふ、我等記を聞きて心安く具足しぬ、諸の比丘尼、是の偈を說き已りて佛に白して言さく、世尊、我等、亦能く佗方の國土に於いて、廣く此の經を宣べん。

阿惟越致又ハ阿鞞跋致トモ云ヒ不退轉ト譯ス必ズ成佛スルニ定マリテ凡地ニ退下スルコトナキ菩薩ノ位也

爾の時に世尊、八十萬億那由佗の諸の菩薩摩訶薩を視て、是の諸の菩薩は、皆是阿惟越致にして、不退法輪を轉じ、諸の陀羅尼を得たり。即ち座より起ちて、佛前に至り、一心に合掌して是の念を作さく、若世尊、我等に此の經を持說せよと告勅したまはば、當

佛今默念ゼシテ告勅セズ　寶塔品ノ三箇ノ勅宣、提婆品ノ二箇ノ諫曉アリ今之レニヨツテ誓言チ立ツルニ何ゾ末代ノ弘通チ印可シ給ハザルヤ

大納言齊信　かずなら命はなにかをしからむ法をとく程をしのぶばかりぞ

に佛の教の如く、廣く斯の法を宣ぶべし。復是の念を作さく、佛、今默然として告勅せられず、我當に云何がすべきか。時に諸の菩薩、佛意に敬順し、幷びに自ら本願を滿せんと欲して、便ち佛前に於いて、獅子吼を作して誓言を發さく、

世尊、我等如來滅後に於いて、十方世界に周旋往返して、能く衆生をして、此の經を書寫し、受持し、讀誦し、其の義を解說し、法の如く修行し、正憶念せしめん。皆是佛の威力ならん。唯願はくば世尊、佗方に在すとも遙かに守護せられよ。

二十行の偈

日蓮上人（開目抄）曰サレバ日蓮ガ法華經ノ智解ハ天台傳敎ニハ千萬ガ一モ及ブコトナケレドモ難ヲ忍ビ慈悲ノスグレタル事ハ恐レチモ懷キヌベシ、定メテ天ノ御計ヒニモ預ルベシト存ズレドモ一分ノシルシモナシ彌々重科ニ沈ム還ツテ此

即時に諸の菩薩、俱に同じく聲を發して、偈を說きて言さく、

唯願はくば慮したまふ爲からず、佛の滅度の後の恐怖惡世の中に於いて、我等當に廣く說くべし、諸の無智の人の惡口し罵詈等し、及び刀杖を加ふる者有らん、我等皆當に忍ぶべし、惡世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に、未だ得ざるを爲得たりと謂ひ、我慢の心充滿せん、或は阿練若に、納衣にして空閑に在りて、自ら眞の道を行ずと謂ひて、人間を輕賤する者有らん、利養に貪著するが故に、白衣の與に法を說きて、世に恭敬せらるること、六通の羅漢の如くならん、是の人惡心を懷き、常に世俗の事を念ひ、名を阿練若

事ヲ計リ見レバ我身法華經ノ行者ニアラザルカ又諸天善神等ノ此ノ國ヲ捨テヽ去リ給ヘルカタ〳〵疑ハシ、而ルニ法華經ノ第五ノ卷勸持品ノ二十行ノ偈ハ日蓮ダニモ此國ニ生レズバ殆ド世尊ハ大妄語ノ人八十萬億那由佗ノ菩薩ハ提婆ガ虛誑罪ニモ墮ヌベシ乃至日蓮ヨリ外ノ諸僧タレノ人カ法華經ニツケテ諸人ニ惡口罵詈セラレ刀杖チ加フル者アル日蓮ナクバ此ノ一偈ノ未來記ハ妄語ト ナリヌ乃至日蓮法華經ノ故ニ度々流サレズハ數數ノ二字イカンガセン此ノ二字ハ天台傳敎モ未ダヨミ給ハズ況ヤ余人ヲヤ　又（聖人御難事）曰日蓮末法ニ出デズバ佛ハ大妄

に假りて、好んで我等が過を出さん、而も是の如き言を作さん、此の諸の比丘等は、利養を貪るを爲つての故に、外道の論議を說く、自ら此の經典を作りて、世間の人を誑惑す、名聞を求むるを爲つての故に、分別して是の經を說く、常に大衆の中に在りて、我等を毀らんと欲するが故に、國王大臣、婆羅門居士、及び餘の比丘衆に向ひて、誹謗して我が惡を說きて、是邪見の人、外道の論議を說くと謂はん、我等佛を敬ひたてまつるが故に、悪く是の諸惡を忍ばん、輕めて汝等は皆是佛なりと言はれん、此の如き輕慢の言を、皆當に忍びて之を受くべし、濁劫惡世の中には、多く諸の

恐怖有らん、惡鬼其の身に入りて、我を罵詈毀辱せん、我等佛を敬信したてまつりて、當に忍辱の鎧を著るべし、是の經を說かんが爲の故に、此の諸の難事を忍ばん、我身命を愛せず、但無上道を惜まん、我等來世に於いて、佛の所囑を護持せん、世尊自ら當に知しめすべし、濁世の惡比丘は、佛の方便、隨宜所說の法を知らずして、惡口して顰蹙し、數數擯出せられ、塔寺を遠離せん、是の如き等の衆惡をも、佛の告勅を念ふが故に、皆當に是の事を忍ぶべし、諸の聚落城邑に、其法を求むる者有らば、我皆其の所に到りて、佛の所囑の法を說かん、我は是世尊の使なり、衆に處して畏るる處無し、我當に善く法

語ノ人多寶十方ノ諸佛ハ虚妄ノ證明ナリ佛滅後二千二百二十餘年ガ間一閻浮提ノ中ニ佛ノ御言ヲ助ケタル人ナリ 但日蓮一人ナ

を說くべし、願はくば佛安穩に住したまへ、我世尊の前諸の來りたまへる十方の佛に於いて、是の如き誓言を發す、佛自ら我が心を知しめせ。

第十四　安樂行品（通論其五——四安樂行髻珠の譬）

解題　末法に於て法華經を弘むるは、怨多くして信じ難しとの佛說を聞いて、初心淺行の菩薩等は堪ふる所にあらずとして、何れも皆他方の弘通を望まれるといふ有樣、そこで文殊菩薩が、其樣な菩薩方でも弘通することの出來る工夫は何ぞ無きものかと佛に御尋ねするので、茲に身、口、意、誓願の四安樂行を說かれるのである、何故に安樂行といふかと伺ふに、此の四法さへ行じたならば意も身も安穩快樂で、又他より尊敬せられるからである、從て此に依て題名を得たのである。

大筋　文殊が佛に申上るには、末世に於て法華經を弘むる心得は如何、佛之れに答へ給ふには、それは四安樂行を修行すればよい、一は身安樂行――此れに行處と親近處との別がある、行處といふは心の行く處で、常に心柔和で辱を忍び、又眞理を達觀するのである、親近處といふのは先づ不親近處から擧ぐれば、國王大臣外道乃至屠者女人等で、而して常に坐禪を好み閑靜なる處に親近して心を修養せよ、（第一親近處）次に天地宇宙の眞相を觀ぜよ、一切は空なり、空なるが故に動ぜず、生ぜず、名なし相なし、但だ因緣によりて有となり、生死苦樂を見る、此の眞實相に常に親近せよ、身は是れ安穩快樂である（第二親近處）二は口安樂行――他の非を口にするな、若し人が進んで難問を齎したならば大乘の善法を以て之れに答へよ、三に意安樂行――意に嫉みなく諂ひ誑く心なく、佛に對しては慈父の如く菩薩に向つては恩師の想を生ぜよ、四に誓願安樂行――總ての人を悉く皆救ひ助けんとの誓願を立てよ、以上の四法を常に行じたならば、國王大臣及び諸の天人等尊敬を表するであらう、何んとなれば、此の法華經は實に希有の法なるが故に、之れを聞く人は未曾有なりと歎じ、之れを說く人を大切に守護するであらう、恰も大王が他を征伐したる場合家臣に各褒美を行ふも、王の髻の中の明珠は容易に與へな

い様なものである、法華經は佛の猥りに他の爲に說かざる秘密の法であるから、之れを說くときは王の髻珠を與へるが如く、人皆爭うて之れに從はんとするは一定である、故に如上の四法を行じて法華經を弘めよ、必ずや安穩にして苦痛あることはない。

以上は智と學とを主とした迹門分である、從つて其の通論に於ても、深く守つて自ら出でざる四安樂行を說く、此に依て智者學者は深山に籠つて法華三昧に入り敢へて社會の感化に進まず、かくしては宗敎としての價値誠に些し、玆に於て次に本門分を起し、積極的布敎を大に試みるのである。

行處ノ心ノ行ク處ニシテ外

妙法蓮華經安樂行品第十四

爾の時に、文殊師利法王子菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、

世尊、是の諸の菩薩は甚だ爲有り難し。佛に敬順したてまつるが故に、大誓願を發す。後の惡世に於いて、是の法華經を護持し、讀誦し、說かん。世尊、菩薩摩訶薩、後の惡世に於いて、云何にしてか能く是の經を說かん。佛、文殊師利に告げたまはく、若菩薩摩訶薩、後の惡世に於いて是の經を說かんと欲せば、當に四法に安住すべし、一には菩薩の行處、親近處に安住して、能く衆生の

辱ヲ忍ビ内ニ眞如ノ理ヲ懷ク

犍陀外道ノ一派ニシテ苦行ヲ以テ涅槃ヲ得ルトセリ

路伽耶陀外道ノ一派順世ト譯シ世情ヲ欲チ迎ヘテ物ヲ奬勵ス、逆路伽耶陀、逆世ト譯シ世情ニ反スル教ヲ立ツルモノ

旃陀羅屠者殺者ト譯シ印度四姓中ノ下位ノ首陀ニ屬ス、

五種不男男ニシテ男ナラザル人、生(生來男女根ヲ具

爲に是の經を演說すべし。文殊師利、云何なるをか菩薩摩訶薩の行處と名くる。若菩薩摩訶薩、忍辱の地に住し、柔和善順にして、卒暴ならず。心亦驚かず。又復法に於いて行ずる所無くして、諸法如實の相を觀じ、亦不分別を行せざる。是を菩薩摩訶薩の行處と名く。云何なるをか菩薩摩訶薩の親近處と名くる。菩薩摩訶薩、國王、王子、大臣、官長に親近せざれ。諸の外道、梵志、尼犍子等、及び世俗の文筆、讚詠の外書を造る、及び路伽耶陀、逆路伽耶陀の者に親近せざれ。亦諸の有ゆる凶戲、相扠、相撲、及び那羅等の種種の變現の戲に親近せざれ。又、旃陀羅、及び豬羊、雞狗を畜ひ、畋獵し漁捕する諸の惡律儀に親近せざれ。是の如き人等、或時に來らば、則ち爲に法を說きて悕望する所無かれ。又、聲聞を求むる比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷に親近せざれ。亦、問訊せざれ。若は房中に於いても、若は經行の處、若は講堂の中に在りても、共に住止せざれ。或時に來らば、宜しきに隨ひて法を說きて、悕求する所無かれ。文殊師利、又菩薩摩訶薩、應に女人の身に於いて、能く欲想を生ずる相を取りて、爲に法を說くべからず。亦見んと樂はざれ。若佗の家に入らんには、小女、處女、寡女等と共に語らざれ。亦復、五種不男の人に近きて、以つて親厚を爲さざれ。獨佗の家に入らざれ。若し因緣有りて、

セザルモノ）劇（去勢セルモノ）妬（男女二根ヲ具シ男根緣ニアヘバ女根妬ミ、女根緣ニアヘバ男根ウラム）變（男女根時ニ何レヘカ變ズ）半（半月毎ニ男女ノ兩根變更ス）日蓮上人（中興入道書）日蓮ハ賤シケレドモ所持ノ法華經ヲ釋迦多寶十方ノ諸佛梵天帝釋、日月天龍神、

獨入ることを須ひん時には、但一心に佛を念ぜよ。若、女人の爲に法を說かんには、齒を露にして笑まざれ。胷臆を現さざれ。乃至法の爲にも、猶親厚せざれ。況や復餘の事をや。樂ひて年少の弟子、沙彌、小兒を畜へざれ。亦、與に師を同じうすることを樂はざれ。常に坐禪を好みて、閑かなる處に在りて其の心を修攝せよ。文殊師利、是を初親近處と名く。復次に菩薩摩訶薩、一切の法を觀ずるに、空なり、如實相なり。顚倒せず、動ぜず、退せず、轉ぜず。虛空の如くにして所有の性無し。一切の語言の道斷え、生ぜず、出せず、起せず。名無く、相無く、實に所有無し。無量、無邊、無礙、無障なり。但

天照大神八幡大菩薩人ノ眼如チチシムガチクノ諸天ノ帝釋如チ敬フガ如クチ母ノ子チ愛スルガ如ク守リ重ンジ給フ故ニ法華經ノ行者チアダム人チ罰シ給フ事父母ノカタキヨリモ朝敵ヨリモ重ク大科ニ行ヒ給フ也日蓮上人（松野尼御返事）日蓮法華經第五安樂行品云文殊師利此法華經於無量國

因緣を以つて有り。顚倒に從ひて生ず。故に說く、常に樂ひて是の如き法相を觀ぜよ。是を菩薩摩訶薩の第二の親近處と名く。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

若菩薩有りて、後の惡世に於いて、無怖畏の心をもつて、此の經を說かんと欲せば、應に行處、及び親近處に入るべし、常に國王、及び國王子、大臣官長、凶險の戲者、及び旃陀羅、外道梵志を離れ、亦、增上慢の人、小乘、三藏の學に貪著する者、破戒の比丘、名字の羅漢、及び比丘尼の、戲笑を好む者に親近せざれ、

中乃至名字不可得聞云此ノ文ノ心ハ我等衆生ノ三界六道ニ輪廻セシ事ハ或ハ天ニ生レ或ハ人ニ生レ或ハ餓鬼ニ生レ畜生ニ生レ無量ノ國ニ生チ受ケテ無邊ノ苦シミヲウケテ樂シミカドモ一度モ法華經ノ國ニ生レズ偶タリト雖モ南無妙法蓮華經ト唱ヘズ唱フルコトハ夢ニモ

ナシ人ノ申スチモ聞カズ

深く五欲に著して現の滅度を求むる、諸の優婆夷に皆親近すること勿れ、是の若き人等、好心を以つて來り、菩薩の所に到りて、佛道を聞かんが爲にせば、菩薩則ち、無所畏の心を以つて、悕望を懷かずして爲に法を說け、寡女處女、及び諸の不男に、皆親近して以つて近厚を爲すこと勿れ、亦、屠兒魁膾、畋獵漁捕、利の爲に殺害するに親近すること莫れ、肉を販りて自活し、女色を衒賣する、是の如きの人に皆親近すること勿れ、凶險の相撲、種種の嬉戲、諸の婬女等に、盡く親近することなかれ、獨屏處にして、女の爲に法を說くこと莫れ、若法を說かん時には、戲笑することを得ること無かれ、里に入りて乞食せんには、一りの比丘を將ねよ、若比丘無くんば一心に佛を念ぜよ、是を則ち名けて、行處近處と爲す、此の二處を以つて、能く安樂に說け、又復、上中下の法、有爲無爲、實不實の法を行ぜざれ、亦、是男是女と分別せざれ、諸法を得ず、知らず見ざれ、是則ち名けて菩薩の行處と爲す、一切の諸法は、空にして所有無し、常住有ること無く、亦起滅無し、是を智者の所親近處と名く、顚倒して、諸法は有なり無なり、是實なり非實なり、是生なり非生なりと分別す、閑かなる處に在りて其の心を修攝し、安住して動ぜざること須彌山の如くせよ、一切の法を

觀ずるに皆所有無し、猶虛空の如し、堅固なること有ること無し、不生なり不出なり不動なり不退なり、常住にして一相なり、是を近處と名く、若比丘有りて、我が滅後に於いて、是の行處、及び親近處に入りて斯の經を說かん時には、怯弱有ること無けん、菩薩有る時に靜室に入りて、正憶念を以つて、義に隨ひて法を觀じ、禪定より起ちて、諸の國王、王子臣民、婆羅門等の爲に、開化し演暢して、斯の經典を說かば、其の心安穩にして、怯弱有ること無けん、文殊師利、是を菩薩の、初法に安住して、能く後の世に於いて、法華經を說くと名く。

又、文殊師利、如來の滅後に、末法の中に於いて、是の經を說かんと欲せば、應に安樂行に住すべし。若は口に宣說し、若は經を讀まん時、樂ひて人、及び經典の過を說かざれ。亦、諸餘の法師を輕慢せざれ。佗人の好惡、長短を說かざれ。聲聞の人に於いて、亦名を稱して、其の過惡を說かざれ。亦名を稱して、其の美きことを讚歎せざれ。又亦、怨嫌の心を生ぜざれ。善く是の如き安樂の心を修するが故に、諸の聽くこと有らん者、其の意に逆はじ。難問する所有らば、小乘の法を以つて答へざれ。但、大乘を以つて、爲に解說して、一切種智を得しめよ。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說

きて言はく、

菩薩は常に、安穩ならしめんことを樂ひて法を說け、清淨の地に於いて牀座を施し、油を以つて身に塗り、塵穢を澡浴し、新淨の衣を著、內外俱に淨くして、法座に安處して、問に隨ひて爲に說く、若比丘及び比丘尼、諸の優婆塞、及び優婆夷、國王王子、羣臣士民有らば、微妙の義を以つて、和顏にして爲に說け、若難問すること有らば、義に隨ひて答へよ、因緣譬諭をもつて、敷演し分別せよ、是の方便を以つて、皆發心せしめ、漸漸に增益して、佛道に入らしめよ、懶惰の意及び懈怠の想を除き、諸の憂惱を離れて、慈心をもつて法を說け、晝夜に常に無上道の敎を說け、諸の因緣無量の譬諭を以つて衆生に開示して咸く歡喜せしめよ衣服臥具、飲食醫藥、而も其の中に於いて悕望する所無かれ、但一心に說法の因緣を念じ、佛道を成じて、衆をして亦爾ならしめんと願ふべし、是則ち大利安樂の供養なり、我が滅度の後に、若比丘有りて能く斯の妙法華經を演說せば、心に嫉恚、諸惱障礙無く、亦憂愁、及び罵詈する者無く、又怖畏、刀杖を加へらるる等無く、亦擯出せらるゝこと無けん、忍に安住するが故に、智者是の如く、善く其の心を修せば、能く安樂に住すること、我が上に說くが如くならん、其の人の

功德は、千萬億劫に、算數譬諭をもつて說くとも盡すこと能はじ、

又、文殊師利苦薩摩訶薩、後の末世の法、滅せんと欲せん時に於いて、斯の經典を受持し、讀誦せん者は、嫉妒、諂誑の心を懷くこと無かれ。亦、佛道を學する者を輕罵し、其の長短を求むること勿れ。若比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の聲聞を求むる者、辟支佛を求むる者、菩薩の道を求むる者、之を惱して、其をして疑悔せしめて、其の人に語りて、『汝等道を去ること甚だ遠し、終に一切種智を得ること能はじ、所以は何ん。汝は是放逸の人なり。道に於いて懈怠なるが故に』と言ふことを得ること無かれ。又亦、諸法を戲論し、諍競する所有るべからず。當に、一切衆生に於いて、大悲の想を起し、諸の如來に於いて、慈父の想を起し、諸の菩薩に於いて、大師の想を起すべし、十方の諸の大菩薩に於いて、常に應に深心に恭敬禮拜すべし。一切衆生に於いて、平等に法を說け、法に順ずるを以つての故に、多くもせず、少くもせず、乃至、深く法を愛せん者にも、亦爲に多く說ざれ。

文殊師利、是の菩薩摩訶薩、後の末世の法滅せんと欲せん時に於いて、是の第三の安樂行を成就すること有らん者は、是の法を說かん時、能く惱亂するもの無けん。好き同學の、共に是の經を讀誦するを得ん。亦、大衆の、

而も來りて聽受し、聽き已りて能く持ち、持ち已りて能く誦し、誦し已りて能く說き、說き已りて能く書き、若は人をしても書かしめ、經卷を供養し、恭敬、尊重、讚歎するを得ん。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

若是の經を說かんと欲せば、當に嫉恚慢、諂誑邪僞の心を捨てて、常に質直の行を修すべし、人を輕懺せず、亦法を戲論せざれ、佗をして疑悔せしめて、汝は佛を得じと云はざれ、是の佛子法を說かんには、常に柔和にして能く忍び、一切を慈悲して懈怠の心を生ぜざれ、十方の大菩薩、衆を愍むが故に道を行ずるに應に恭敬の心を生すべし、是則ち我が大師なりと、諸佛世尊に於いて、無上の父の想を生せ、憍慢の心を破して、法を說くに障礙無からしめよ、第三の法是の如し、智者應に守護すべし、一心に安樂に行ぜば無量の衆に敬はれん。

又、文殊師利、菩薩摩訶薩の、後の末世の、法滅せんと欲せん時に於いて、法華經を受持すること有らん者は、在家、出家の人の中に於いて、大慈の心を生じ、菩薩に非ざる人の中に於いて、大悲の心を生じて、應に是の念を作すべし。

是の如きの人は、則ち爲、大いに如來の方便隨宜の說法を失へり。聞かず、知らず、覺らず、問はず、信ぜず、解せず。其の人是の經を、問はず、信ぜず、解せずと雖も、我、阿耨多羅三藐三菩提を得ん時、隨ひて何れの地に在りても神通力、智慧力を以つて、之を引きて、是の法の中に住することを得しめん。

文殊師利、是菩薩摩訶薩、如來の滅後に於いて、此の第四の法を成就すること有らん者は、是の法を說かん時、過失有ること無けん。常に比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、國王、王子、大臣、人民の婆羅門、居士等に、供養、恭敬、尊重、讚歎せらるることを爲ん。虛空の諸天、法を聽かんが爲の故に、亦常に隨侍せん。若聚樂、城邑、空閑、林中に在るとき、人有りて、來りて難問せんと欲せば、諸天晝夜に、常に法の爲の故に、而も之を衞護し、能く聽かん者をして、皆歡喜することを得しめん。

所以は何ん、此の經は是、一切の過去、未來、現在の諸佛の、神力をもつて護りたまふ所なるが故なり。

文殊師利、是の法華經は、無量の國の中に於いて、乃至名字をも聞くことを得べからず。何に況や見ることを得、受持し、讀誦せんをや。文殊師利、譬へば、强力の轉輪聖王の威勢を以つて、諸國を降伏せんと欲せんに、而も諸の小王、其の命に順はざらん。時に轉輪王、種種の兵を起

して、往いて討伐するに、王、兵衆の戰ふに功有る者を見て、即ち大いに歡喜して、功に隨ひて賞賜して、或は田宅、聚落、城邑を與へ、或は衣服、嚴身の具を與へ、或は種種の珍寶、金、銀、瑠璃、硨磲、碼碯、珊瑚、琥珀、象馬、車乘、奴婢、人民を與ふ。唯、髻中の明珠のみ、以つて之を與へず。所以は何ん。獨王の頂上に、此の一つの珠有り、若以つて之を與へば、王の諸の眷屬、必ず大いに驚き怪まんが如く、文殊師利、如來も亦復是の如し。禪定、智慧の力を以つて、法の國土を得て、三界に王たり。而るを諸の魔王、肯へて順伏せず。如來の賢聖の諸將、之と共に戰ふに、

其の功有る者には、心亦歡喜して、四衆の中に於いて、爲に諸經を說きて、其の心をして悅ばしめ、賜ふに、禪定、解脫、無漏根力の諸法の財を以つてし、又復、涅槃の城を賜與して、滅度を得たりと言ひて、其の心を引導して、皆歡喜せしむ。而も爲に、是の法華經を說かず。文殊師利、轉輪王の諸の兵衆の、大功有る者を見ては、心甚だ歡喜して、此の難信の珠の、久しく髻中に在りて、妄りに人に與へざるを以つて、今之を與へんが如く、如來も亦復是の如し。三界の中に於いて、爲大法王たり。法を以つて一切衆生を敎化す。賢聖の軍の、五陰魔、煩惱魔、死魔と共に戰ふに、大

想、行、識ノ五陰（又ハ蘊）ヲ云フ　煩惱魔　四魔ノ一、八萬四千ノ煩惱ヲ指ス　死魔　四魔ノ一、死スルコトナリ修行ノ人死スレバ修行ヲ續クル能ハズ故ニ云フ　以上ニ天子魔（第六天ノ魔）ヲ加ヘテ四魔ト云フ

功勳有りて、三毒を滅し、三界を出でて、魔網を破すを見ては、爾の時如來、亦大いに歡喜して、此の法華經の、能く衆生をして、一切智に至らしめ、一切世間に怨多くして信じ難く、先に未だ說かざる所なるを、而も今之を說く。文殊師利、此の法華經は、是諸の如來の第一の說、諸說の中に於いて最も爲甚深なり。末後に賜與すること、彼の强力の王の、久しく護れる明珠を、今乃ち之を與ふるが如し。文殊師利、此の法華經は、諸佛如來の祕密の藏なり。諸經の中に於いて、最も其の上に在り。長夜に守護して、妄りに宣說せざるを、始めて今日に於いて、乃ち汝等が與に之を敷演す。

日蓮上人（報恩抄）曰　抑法華經ノ第五ニ文殊師利此ノ法華經ハ諸佛如來祕密ノ藏諸經ノ中ニ於テ最モ其上ニ在リ云云此ノ經文ノ如クナラバ法華經ハ大日經等ノ衆經ノ頂上ニ住シ給フ正法ナリ、サルニテハ善無畏、金剛智、不空、弘法、慈覺、智證等ハ此ノ經文ヲバイカンガ會通セサ

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

常に忍辱を行じ、一切を哀愍して、乃ち能く、佛の讚めたまふ所の經を演說せよ、後の末世の時、此の經を持たん者は、家出家、及び非菩薩とに於いて、應に慈悲を生ずべし、斯等、是の經を聞かず信ぜず、則ち爲大失なり、我佛道を得て、諸の方便を以つて、爲に此の法を說きて、其の中に住せしめん。譬へば强力の轉輪の王、兵の戰ひて功有るに、諸物の象馬車乘、嚴身の具、及び諸の田宅、聚落城邑を賞賜し、或は衣服、種種の珍寶、奴婢財物を與へ、歡喜して賜與す、如勇

セ給フベキ待賢門院堀川二つなき玉をこめたるもとゆひのとくことかたき法とこそきけ

家出家　家ハ在家非菩薩　三界六道ノ凡夫ニテ少シモ菩提ノ心ヲ發サヾルモノ

日蓮上人（持法華問答抄）曰嬉哉釋尊出世ノ髻ノ中ノ明珠今度我

健にして、能く難事を爲すこと有るには、王髻中の、明珠を說きて之を賜はんが如く、如來も亦爾なり、爲諸法の王なり、忍辱の大力、智慧の寶藏あり、大慈悲を以つて、法の如く世を化す、一切の人の、諸の苦惱を受けて、解脫を欲求して、諸の魔と戰ふを見て、是の衆生の爲に種種の法を說き、大方便を以つて此の諸經を說く、既に衆生其の力を得已んぬと知りては、末後に乃ち爲に是の法華を說きたまふ、王髻の明珠を解きて之を與へんが如し、此の經は爲尊く衆經の中の上なり、我常に守護して妄りに開示せず、今正しく是時なり、汝等が爲に說く、我が滅度の後に佛道を求め

身ニ得タル事ヨ十方諸佛ノ證誠トシテユルガセナラズサコソハ一切世間多怨難信ト知ナガラ爭カ一分ノ疑心チ殘シテ決定無有疑ノ佛ニナラザランヤ

日蓮上人（土籠御書）曰あはれ殿（日朗上人）は法華經一部ヲ色心二法共ニアソバシタル御身ナレバ父母六親一切衆生チ

ん者、安穩に斯の經を演說することを得んと欲せば、應當に是の如き四法に親近すべし、是の經を讀まん者は、常に憂惱無く、又病痛無く、顏色鮮白ならん、貧窮卑賤醜陋に生れじ、衆生見んと樂ふこと、賢聖を慕ふが如くならん、天の諸の童子、以つて給使を爲さん、刀杖も加へず、毒も害すること能はじ、若人惡み罵らば口則ち閉塞せん、遊行するに畏れなきこと、師子王の如く、智慧の光明、日の照すが如くならん、若夢の中に於いても、但妙なる事を見ん、諸の如來の師子の座に坐して、諸の比丘衆に圍繞せられて說法したまふを見ん、又龍神、阿脩羅等、數恆沙の如くにして恭敬合掌し、自ら其の身を見るに、

モ助クベキ御身也法華經ヲ餘人ノヨミ候ハ口バカリ言パカリハ讀メドモ身ニヨマズ色心二法共ニアソバサレタルコソ貴クク候ヘ天諸童子以爲給仕刀杖不可加毒不能害ト說カレテ候ヘバ別ノ事ハアル可ラズ籠チバ出サセ給ヒ候ハヾトクトク來リ給ヘ見奉リ見エ奉ラン

而も爲に法を說くと見ん、又諸佛の身相金色にして、無量の光を放ちて一切を照し、梵音聲を以つて諸法を演說し、佛四衆の爲に、無上の法を說きたまふ、身を見るに中に處して、合掌して佛を讚じ、法を聞きて歡喜して、供養を爲し、陀羅尼を得、不退の智を證す、佛其の心、深く佛道に入れりと知しめして、即ち爲に最正覺を成ずることを授記して、汝善男子、當に來世に於いて、無量智の佛の大道を得て、國土嚴淨にして、廣大なること比無く、亦四衆有りて、合掌して法を聽くべしとのたまふを見ん。又自身山林の中に在りて、善法を修習し、諸の實相を證し、深く禪定に入りて、

十方の佛を見たてまつると見ん、諸佛の身金色にして、百福の相莊嚴したまふ、法を聞きて人の爲に說く、常に是の好き夢有らん、又夢むらく國王と作りて、宮殿眷屬及び上妙の五欲を捨てて、道場に行詣し、菩提樹下に在りて、師子の座に處し、道を求むること七日を過ぎて、諸佛の智を得、無上道を成じ已りて、起ちて法輪を轉じ、四衆の爲に法を說くこと千萬億劫を經、無漏の妙法を說きて無量の衆生を度して、後に當に涅槃に入ること、煙盡きて燈の滅ゆるが如し、若後の惡世の中に、是の第一の法を說かば、是の人大利を得ること、上の諸の功德の如くならん。

法華經本門分

自二從地涌出品一至二勸發品一

日蓮上人曰く、法華經ニ又二經アリ、所謂迹門ト本門トナリ、本迹ノ相違ハ水火天地ノ違目ナリ、と本門とは根本の法門といふ事である、門は能く通ずるに名けたるものなれば、根本の法門とは生死の煩惱世界から、寂靜の極樂世界へ通ずべき唯一の通路であるといふ事である、法華經譬諭品に曰く、佛敎ノ門ヲ以テ三界ノ苦ヲ出ヅと、又曰く、其ノ家廣大ニシテ唯一門アリと、娑婆世界廣しと雖、生死の苦界を免れ出でんとせば、佛敎中法華經の一門より外に全く有ることないのである、それ故

に此の法華經を根本法門と名け略して本門といふのである、其の本を時間的にいへば久遠本時、空間的には本地の娑婆、人に約すれば本師釋迦尊、法に就ていへば本法妙經である、而して其眞體は何ぞといふと、本佛妙法蓮華經尊である、此の妙法蓮華經尊が壽量品で、教主釋迦牟尼佛に即して顯れ給うた、そこで其の間の釋尊を本佛釋迦如來と申し奉る、それ故に同じ釋迦佛の說き給うた御經でも、本佛顯現して說き給うた本門の八品（自二從地涌出品一至二屬累品一）と、それ以外とは全く天地の相違を生ずる譯である、日蓮上人云く、抑此御本尊ハ在世五十餘年ノ中ニハ八年、八年ノ間ニモ涌出品ヨリ屬累品マデ八品ニ顯レ給フナリと、而して本佛の即せざる釋尊を、日蓮上人は其著敎行證書に、爾前迹門ノ釋尊タリトモ物ノ數ナラズと、法華經より以前を爾前といひ、法華經の中にても本佛の顯れざる已前を迹門といふ、即ち本佛の即せる釋尊は本門の本尊として、尊貴極みなしと雖、然らざる時は物の數ともせざるのである、されば本佛の顯現せる如來壽量品の價値に於ては、日蓮上人は激賞して云く、一切經ノ中ニ此壽量品マシマサズバ、天ニ日月ナク國ニ大王ナク、山海ニ玉ナク人ニタマシヒ無カランガ如シと、或は開目抄には本門顯れざれば迹門の授記作佛も根なし草の波上に漂ふに似たりともいはれてある、

法華經一經の生命は壽量品によりて存し、壽重品の本佛を離れては全く意義を失するに至るのである、故に本門顯れたる以上本佛妙法蓮華經尊を以て統一し、一經に題するに妙法蓮華經を以てし、品々段々に名くるに妙法蓮華經の序品、妙法蓮華經の方便品乃至妙法蓮華經如來の壽量品等と稱するのである、かくて始めて方便品の諸法實相の大哲案も、本門の一大事實によりて證明せられ、二乘の授記作佛も本佛の先覺によりて、始めて確實に裏書を與へられたるものと謂ふべきである。

第十五　從地涌出品（序論及本論其一＝本化の涌出父少子老の譬）

解題　迹門分に序、本、通の三論段ありしが如く、本門分にも亦之れが具つてあるのである、而し迹門の夫れの如く品段によりて明に區別することは出來ぬが、意義の上より之れを立つるに妨ぐることがない、即ち當品の始より中程、當ニ精進シテ一心ナルベシ我レ此ノ事ヲ說ント欲ス、乃至是ノ如キヲ今當ニ說クベシ汝等一心ニ聽ケ迄の五字偈四行を以て序論を終り、爾時ニ世尊是ノ偈ヲ說キ已テ彌勒菩薩ニ告給ハクより本論に立入るのである。

偖迹門の分際ですら、序論に於ては彼此の六瑞といふ奇瑞を示した位であるから、本門に於ける先祥は實に空前絶後の摩訶不思議が現ぜられねばならぬ、即ち大地震裂して尊貴極まりなき大菩薩が涌出し給ふ、其の數無量と註されてある、以下之れを略述せん。

大筋

序論

佛が再三再四の仰せであるので、他方より來れる大勢の菩薩が、佛の滅度の後の此土の弘通を乞ひ、誓言を立てられるのである、弘通の鳳詔も屢々であるが菩薩の發誓も亦數々である、而も未だ御許しがない、菩薩は此度こそは御命令があることだと思うて一心に合掌して御待ちして居ると、「止ミネ善男子、汝等ガ此ノ經ヲ護持センコトヲ須ヒジ」とキツパリ御斷りになり、而して我れには六萬恒沙の弟子がある、是等が我が法を弘むべきであると仰せになつた、と同時に娑婆三千大千世界の國土が地皆震裂して、其中から無數の大菩薩が涌き出でた、何れも立派なお方ばかり、文殊彌勒等に比すべきでない高貴の御尊容、其中に四人の上首がある、所謂る上行、無邊行、淨行、安立行の四大士である、佛前に進んで御挨拶を申し上げた。

其時に彌勒等の大菩薩方が、驚いたの驚かないのといふ處でない、己が目を疑ひ、我が耳を惑ふといふ有樣、これは一體何事ぞ、誓願を立てよとの佛勅に我も我もと

弘經を望んだ、處が止ミネ善男子では、丸で論にも杭にもかゝつた話でない、それに弟子ぢやといはれた方々を見るに丸で釋迦佛の御師匠の樣な方計り、其處で彌勒菩薩が衆疑を代表して佛に伺ひ奉るには、我れ補處の位にあれども此の中の一人だも識らず、何れも未見今見である、何佛の弟子なりや、何れの處に住するや、何の爲に出現し給ふか、願ば大衆の疑を解けと、又來集分身の客佛隨身の弟子が何れも皆疑心に充たさる、茲に於て釋迦牟尼佛は、之れに對へて曰く、善哉々々能く此の大事を問へり、今當に佛の大勢力を示すべし汝等一心に聽け。

以上が序論である、補處といへば佛の候補者といふ意味で、次番出世の救世大法王である、其の補處の彌勒が、涌出菩薩幾億萬の中に其の一人も見知らぬとは妙ではないか、丸で地球の人と火星の人との會合の樣である、尤も迹門の序品の時にも此の彌勒は判らなんだ、而し其の時は文殊が居て說明を加へた、今度はどうだ、彼れも亦止ミネの一喝を喰うた仲間である、到底文殊輩の遠く及ぶべき問題でない、此れを以て見ても其の祥瑞の迹門に超過して居ることが思はれる。

本論

佛彌勒に告給ふには、此の大衆は我れ此土に於て成佛してより敎化示導せしもの、住處は此の土の下方の空中なり、彌勒等謂へらく、釋迦如來成佛

已來漸く四十餘年、如何にして此の大佛事を遂げしぞ、即ち佛に曰さく、世尊茲に人あり色美しく髪黑し、年僅に廿五、時に百歳の翁を捕へ、これ我子なりといひ、又翁も年少を指して我が父なり、我れを養育せりといはん、之れ將た信ずることを得べきか、佛も亦然り、此の大菩薩は功を積み德を累ねたるもの、而も其數數ふべからず、如何にして少時間に之れをなし遂げ給へる、我等は佛の虛言なきを信ずれども、未來の人これを聞かば、必ずや疑うて法を破らん、願ば未來世の人の爲に之の疑を解き給へと。

吾人は曩に寶塔品の下に於て、末代弘通の印授、何人の手に歸すべきやを懸題として置た、諸君の考へが果して其の當を得て居つたか、恐らくは鬼神と雖之の變化は豫測することは出來なかつたであらう、而して茲に更に問題を生ぜり、此の釋迦如何にして此の大衆を敎導したりしか、これ佛の方便か將た眞實か、諸君の考案を回す又妙ではないか。

日蓮上人（瑞相御書）曰其上本門ト申スハ又爾前ノ經々ノ瑞ニ迹門

妙法蓮華經從地涌出品第十五

爾の時に佗方の國土の、諸の來れる菩薩摩訶薩の、八恆河沙の數に過ぎたるが、大衆の中に於いて起立し、合掌し、禮を作して佛に白して言さく、

世尊、若我等佛の滅後に於いて、此の娑婆世界に在りて、勤加精進して、是の經典を護持し、讀誦し、書寫し、供養せんことを聽したまはば、當に此の土に於いて、廣く之を說きたてまつるべし。爾の時に佛、諸の菩薩摩訶薩衆に告げたまはく、

止みね善男子、汝等が此の經を護持せんことを須ひじ、

チ對スルヨリモ大ナル瑞ナリ大寶塔ノ地ヨリチドリイデシ地涌千界大地ヨリナラビ出シ大震動ハ大風ノ大海ノ如クナル大波ノ蘆ノ葉ノ如クナル小船ノ追帆ニツクガ如クナリシナリサレバ序品ノ瑞チバ彌勒ハ文殊ニ問ヒ涌出品ノ大瑞チハ慈氏（彌勒ノコト）ハ佛ニ問ヒ奉ルコレチ妙樂（天台宗六祖）釋シテ云迹事ハ淺近文殊ニ寄ス可シ本地ハ裁シ難シ故ニ唯佛ニ託ス云云

止みね善男子の事

日蓮上人（新尼御返事）曰金色世界ノ文殊師利、兜史多天宮ノ彌勒菩薩、補陀落山ノ觀世音、日月淨明德佛ノ御弟子藥王菩薩等ノ諸大士我モ我モト

所以は何ん。我が娑婆世界に、自ら六萬恆河沙等の菩薩摩訶薩有り。一一の菩薩に、各六萬恆河沙の眷屬有り。一定の諸人等能く我が滅後に於いて、護持し、讀誦し、廣く此の經を說かん。佛、是を說きたまふ時、娑婆世界の三千大千の國土、地皆震裂して、其の中より無量千萬億の菩薩摩訶薩有りて、同時に涌出せり。是の諸の菩薩は、身皆金色にして、三十二相、無量の光明あり。先より盡く娑婆世界の下、此の界の虛空の中に在りて住せり。是の諸の菩薩、釋迦牟尼佛の所說の音聲を聞きて、下より發來せり。一一の菩薩、皆是、大衆の唱導の首なり。各六萬恆河沙の眷屬を將ゐたり。況や五萬、四萬、三萬、二萬、一萬恆沙等の眷屬を將ゐたる者をや。況や復、乃至一恆河沙、半恆河沙、四分の一、乃至千萬億那由佗分の一なるをや。況や復、千萬億那由佗の眷屬なるをや。況や復、億萬の眷屬なるをや。況や復、千萬、百萬、乃至一萬なるをや。況や復、一千、一百、乃至一十なるをや。況や復、五、四、三、二、一の弟子を將ゐたる者をや。況や復、單己にして遠離の行を樂へるをや。是の如き等比、無量無邊にして、算數譬諭も知ること能はざる所なり。是の諸の菩薩地より出で已りて、各虛空の、七寶の妙塔の多寶如來、釋迦牟尼佛の所に詣づ。到り已りて、二世

尊に向ひて、頭面に足を禮し、乃ち諸の寶樹の下の、師子座の上の佛の所に至りて、亦皆禮を作して、右に繞ること三帀して、合掌恭敬し、諸の菩薩の、種種の讚法を以つて、以つて讚歎したてまつり、一面に住在し、欣樂して二世尊を瞻仰す。是の諸の菩薩摩訶薩、地より涌出して、諸の菩薩の種種の讚法を以つて、佛を讚めたてまつる。是の如くする時の間に、五十小劫を經たり。是の時に釋迦牟尼佛、默然として坐したまへり。及び諸の四衆も、亦皆、默然たること五十小劫、佛の神力の故に、諸の大衆をして半日の如しと謂はしむ。爾の時に四衆、亦、佛の神力を以つての故に、諸の菩薩、無量百千萬億の國土の虛空に徧滿せるを見る。是の菩薩衆の中に、四導師有り。一をば上行と名け、二をば無邊行と名け、三をば淨行と名け、四をば安立行と名く。是の四菩薩、其の衆中に於いて、最も爲上首唱導の師なり。大衆の前に在りて、各共に合掌して、釋迦牟尼佛を觀たてまつりて、問訊して言さく、

世尊、少病少惱にして、安樂に行じたまふや不や。應に度すべき所の者の、敎を受くること易しや不や。世尊をして疲勞を生さしめざるや。

爾の時に四大菩薩、而も偈を說きて言さく、

世尊は安樂にして、少病少惱にいますや、衆生を敎化し

望ミ給ヒシモ叶ハズ是等ハ智惠アイミジク才學アル人人トハ響ケドモ未ダ日淺シ學モ始メタリ末代ノ大難忍ビ難カルベシ我五百塵點劫ヨリ大地ノ底ニカクシオキタルノ眞ノ弟子アルベシトテ上行菩薩等ヲ涌出シ給ヒテ法華經ノ本門ノ肝心タル妙法蓮華經ノ五字ヲ

讓ラセ給ヒシカ穴賢アナカシコ我滅度ノ後正法一千年像法一千年ニ弘通スベカラズ末法ノ始ノ謗法ノ法師一闡浮提ニ充滿シテ乃至諸人皆死テ無間地獄ニ墜ルコト雨ノ如ク繁カラン時此五字ノ大曼荼羅ヲ身ニ帶ビシ心ニ存セバ諸王ハ國ヲ扶ケ萬民ハ難ヲ免レン乃至後生ノ大火災ヲ脫ルノ

ベシト佛記シ置カセ給ヒヌ半日の如し五十小劫ノ長日月間ノ出來事モ餘リノ惑耳驚心ニ半日ノ如ク思ヘル也　法印　經賢　斧の柄もくちやしぬらん驚の山しばしとおもふ法のむしろに唱導の師唱へ勸メ導クモノノ上首ノ意

たまふに、疲倦無きことを得たまへりや、又諸の衆生化を受くること易しや不や、世尊をして疲勞を生さしめざるや。

爾の時に世尊、諸の菩薩大衆の中に於いて、是の言を作したまはく、

是の如し是の如し、諸の善男子、如來は安樂にして少病少惱なり。諸の衆生等は、化度すべきこと易し。疲勞有ること無し。所以は何ん。是の諸の衆生は、世世より已來、常に我が化を受けたり。亦、過去の諸佛に於いて、供養尊重して、諸の善根を種ゑたり。此の諸の衆生は、始我が身を見、我が所說を聞きて、即ち皆、信受して如來の慧に入りにき。先より修習して、小乘を學せる者をば除く。是の如きの人も、我、今亦是の經を聞きて、佛慧に入ることを得しむ。

爾の時に諸の大菩薩、偈を說きて言さく、善い哉善い哉、大雄世尊、諸の衆生等、化度したまふべきこと易し、能く諸佛の、甚深の智慧を問ひたてまつり、聞き已りて信解せり、我等隨喜す。

時に世尊、上首の諸の大菩薩を讚歎したまはく、善い哉善い哉、善男子。汝等能く如來に於いて、隨喜の心を發せり。

爾の時に彌勒菩薩、及び八千恆河沙の諸の菩薩衆、皆是

念を作さく、

我等昔より已來、是の如き大菩薩摩訶薩衆の、地より涌出して、世尊の前に住して、合掌し供養して、如來を問訊したてまつるを見ず聞かず。

時に彌勒菩薩摩訶薩、八千恆河沙の諸の菩薩等の心の所念を知り、幷びに自ら所疑を決せんと欲して合掌し、佛に向ひて偈を以つて問ひて曰さく、

無量千萬億の大衆の諸の菩薩は、昔より未だ曾て見ざる所なり、願はくば兩足尊說きたまへ、是何れの所より來れる、何の因緣を以つてか集れる、巨身に大神通ありて智慧思議し叵し、其の志念堅固にして大忍辱力

日蓮上人（呵責謗法抄）曰今此ノ四菩薩出サセ給ヒテ後釋迦如來ニハ九代ノ本師三世ノ佛ノ御母ニテチハスル文殊師利菩薩モ一生補處トノシラセ給フ彌勒菩薩モ此菩薩ニ値ヒヌレバ物トモ見エサセ給ハズ譬ヘバ山ガツガ月鄉ニ交リ猿猴ガ師子ノ座ニ列ナ

有り、衆生の見んと樂ふ所なり、爲何れの所よりか來れる、一一の諸の菩薩の、所將の諸の眷屬、其の數量有ること無く恆河沙等の如し、或は大菩薩の六萬恆沙を將ゐたる、是の如き諸の大衆、一心に佛道を求む、是の諸の大師等、六萬恆河沙あり、俱に來りて佛を供養し、及び是の經を護持す、五萬恆沙を將ゐたる、其の數是に過ぎたり、四萬及び三萬二萬より一萬に至る、一千一百等、乃至一恆沙、半及び三四分、億萬分の一、千萬那由佗、萬億の諸の弟子、乃ち半億に至る、其の數復上に過ぎたり、百萬より一萬に至り、一千及び一百、五十と一十と乃至三二一、單己にして眷屬無く、

ルガ如シ
單己にして眷屬無く一箇ノ弟子ナク一人ノ信徒ナキ菩薩中院入道一品
八百日ゆく濱の眞砂のかず知らず悟れる人もありけるものを

獨處を樂ふ者、俱に佛所に來至せる、其の數轉た上に過ぎたり、是の如き諸の大衆、若人等を行いて數ふること、恆沙劫を過ぐとも猶盡して知ること能はじ、是の諸の大威德、精進の菩薩衆は、誰か其の爲に法を說きて敎化して成就せる、誰に從ひて初めて發心し、何れの佛法をか稱揚し、誰れの經をか受持し行じ、何れの佛道をか修習せる、是の如き諸の菩薩は神通大智力あり、四方の地震裂して皆中より涌出せり、世尊我昔より來、未だ曾て是の事を見ず、願はくば其の所從の國土の名號を說きたまへ、我常に諸國に遊べども、未だ曾て是の事を見ず、我此の衆の中に於いて、乃し

分身の諸佛天月ノシバラク池中ニ姿ヲ宿スガ如ク本佛釋尊衆生敎化ノ日ニ處々ニ佛身ヲ名乘リ給フ、ソノ佛コソ分身佛ナレ、而シ乍ラ之レ世界總

一人をも識らず、忽然に地より出でたり、願はくば其の因緣を說きたまへ、今此の大會の、無量百千億なる、是の諸の菩薩等、皆此の事を知らんと欲す、是の諸の菩薩衆、本末の因緣あるべし、無量德の世尊、唯願はくば衆の疑を決したまへ。

爾の時に釋迦牟尼佛の分身の諸佛、無量千萬億の佗方の國土より來りたまへる者、八方の諸の寶樹の下の師子座の上に在して、結跏趺坐したまへる。其の佛の侍者、各各に是の菩薩大衆の、三千大千世界の四方に於いて、地より涌出して虛空に住せるを見て、各其の佛に白して言さく、

テノ時間、空間ノ中ニアル佛陀ヲ統一セルヲ示セルモノ也

次いで後に作佛すべし釋尊滅後五十六億七千萬年ヲ経テ娑婆世界ニ於テ出世成道スト云フ

世尊、此の諸の無量無邊阿僧祇の菩薩大衆は、何れの所よりか來れる。

爾の時に諸佛、各侍者に告げたまはく、

諸の善男子、且く須臾を待て、菩薩摩訶薩有り、名を彌勒と曰ふ。釋迦牟尼佛の授記したまふ所なり。次いで後に作佛すべし。已に斯の事を問ひたてまつる。佛今之に答へたまはん。汝等自ら當に、是に因りて聞くことを得べし。

爾の時に釋迦牟尼佛、彌勒菩薩に告げたまはく、

善い哉善い哉阿逸多、乃し能く佛に、是の如き大事を問へり。汝等當に、共に一心に精進の鎧を被、堅固の意を發すべし。如來今、諸佛の智慧、諸佛の自在神通の力、諸佛の師子奮迅の力、諸佛の威猛大勢の力を顯發し宣示せんと欲す。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

當に精進して一心なるべし、我此の事を說かんと欲す、疑悔有ることを得ること勿れ、佛智は思議し叵し、汝今信力を出して忍善の中に住せよ、昔より未だ聞かざる所の法、今皆當に聞くことを得べし、我今汝を安慰す、疑懼を懷くことを得ること勿れ、佛は不實の語無し、智慧量るべからず、得る所の第一の法、甚深にし

忍善　忍耐ト善法

此ノ汝等一心に聞けニテ本門ノ序論ハ終ル

爾の時に世尊ヨリ本門分本論ニ入ル

て分別し難し、是の如きを今當に說くべし、汝等一心に聽け。

爾の時に世尊、此の偈を說き已りて、彌勒菩薩に告げたまはく、

我今、此の大衆に於いて汝等に宣告す。阿逸多、是の諸の大菩薩摩訶薩の、無量無數阿僧祇にして地より涌出せる。汝等昔より未だ見ざる所の者は、我是の娑婆世界に於いて、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、是の諸の菩薩を敎化示導し、其の心を調伏して、道の意を發さしめたり。此の諸菩薩は、皆是の娑婆世界の下、此の界の虛空の中に於いて住せり。

阿逸多ト略シテ阿逸ト云フ彌勒菩薩ノ事也無能勝ト譯ス

阿耨多羅三藐三菩提無上正道又ハ無上覺ト譯ス

道の意無上道の意を發す

諸の經典に於いて、讀誦通利し、思惟分別し、正憶念せり。阿逸多、是の諸の善男子等は、衆に在りて多く所說有ることを樂はず、常に靜かなる處を樂ひ、勤行精進して、未だ曾て休息せず。亦、人天に依止して住せず。常に深智を樂ひて、障礙有ること無し。亦常に諸佛の法を樂ひ、一心に精進して無上慧を求む。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

阿逸汝當に知るべし、是の諸の大菩薩は、無數劫より來、佛の智慧を修習せり、悉く是我が所化として大道心を發さしめたり、此等は是我が子なり、是の世界に

依止せり、常に頭陀の事を行じて靜かなる處を志樂し、大衆の憒鬧を捨てて、所說多きことを樂はず、是の如き諸子等は、我が道法を學習して、晝夜に常に精進す、佛道を求むるを爲つての故に娑婆世界の下方の空中に在りて住す、志念力堅固にして常に智慧を勤求し、種種の妙法を說きて其の心畏るる所無し、我伽耶城、菩提樹下に於いて坐して、最正覺を成ずることを得て、無上の法輪を轉じ、爾して乃ち之を敎化して、初めて道心を發さしむ、今皆不退に住せり、悉く當に成佛すること、我久遠より來、是等の衆を敎化せり。

伽耶城　印度摩揭陀國パトナノ西南ニアル都名、此ノ都ノ南方約三里ノ處ニテ佛成道シ給フ

爾の時に彌勒菩薩摩訶薩、及び無數の諸の菩薩等、心に疑惑を生じ、未曾有なりと怪みて、是の念を作さく、云何ぞ世尊、少時の間に於いて、是の如き無量無邊阿僧祇の諸の大菩薩を敎化して、阿耨多羅三藐三菩提に住せしめたまへる。即ち佛に白して言さく、世尊、如來太子たりし時、釋の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまへり。是より已來、始めて四十餘年を過ぎたり。世尊、云何ぞ此の少時に於いて、大いに佛事を作したまへる。佛の勢力を以つてや、佛の功德を以つてや、是の如き無量の大菩薩衆を敎化して、當に阿耨

釋の宮　釋迦種ノ王宮ヲ云フ即チ釋尊太子タリシ時ノ居城ヲ指ス

多羅三藐三菩提を成ぜしめたまふ。世尊、此の大菩薩衆は、假使人有りて、千萬億劫に於いて、數ふとも盡すこと能はず。其の邊を得じ、斯等は久遠より已來、無量無邊の諸佛の所に於いて、諸の善根を植ゑ、菩薩の道を成就し、常に梵行を修せり。世尊、此の如き事は、世の信じ難き所なり。譬へば人有りて、色美しく、髮黑くして年二十五なる。百歲の人を指して、是我が子なりと言はん。其の百歲の人、亦年少を指して、是我が父なり、我等を生育せりと言はん。是の事信じ難きが如く、佛も亦是の如し。得道より已來、其實に未だ久しからず。而るに此の大衆の、諸の菩薩等は、已に無量千萬億劫に於いて、佛道の爲の故に勤行精進し、善く無量百千萬億の三昧に入出住し、大神通を得、久しく梵行を修し、善能く次第に諸の善法を習ひ、問答に巧みに、人中の寶、一切世間甚だ爲希有なり。今日世尊、方に佛道を得たまひし時、初めて發心せしめて、教化示導して、阿耨多羅三藐三菩提に向はしめたりと云ふ。世尊、佛を得たまひて未だ久しからざるに、乃し能く此の大功德の事を作したまへり。我等は復、佛の隨宜の所說の、佛の所出の言、未だ曾て虛妄ならずと信じ、佛の所知は、皆悉く通達すと雖も、然も諸の新發意の菩薩、佛の滅後に於いて、若是の語を聞

大僧正日扇
池水の濁りにしまぬ蓮の葉
は雨のふるにも濡れずぞあ
りける

かば、或は信受せずして、法を破する罪業の因縁を起さん。唯然なり世尊、願はくば爲に解説して、我等が疑を除きたまへ。及び未來世の諸の善男子、此の事を聞き已りなば、亦疑を生ぜじ。

爾の時に彌勒菩薩、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言さく、

佛、昔釋種より出家して伽耶に近く、菩提樹に坐したまへり、爾りしより來尚未だ久しからず、此の諸の佛子等は、其の數量るべからず、久しく已に佛道を行じて、神通智力に住せり、善く菩薩の道を學して、世間の法に染まざること蓮華の水に在るが如し、地より

涌出して、皆恭敬の心を起し世尊の前に住せり、是の事思議し難し、云何ぞ信ずべき、佛の得道は甚だ近く、成就したまへる所は甚だ多し、願はくば爲に衆の疑を除き實の如く分別し説きたまへ、譬へば少壯なる人の、年始めて二十五なる、人に百歳の子の髪白くして面皺めるを示して、是等我が所生なりといひ、子も亦是父なりと説かん、父は少く子は老いたる、世を擧りて信ぜざる所ならんが如く、世尊も亦是の如し、得道より來甚だ近し、是の諸の菩薩等は、志固くして怯弱無し、無量劫より來、而も菩薩の道を行ぜり、難問答に巧にして、其の心畏るる所無く、忍辱の心決定し

端正にして威德有り、十方の佛の讃めたまふ所なり、善能く分別し說けり、人衆に在ることを樂はず、常に好みて禪定に在り、佛道を求むるを爲つての故に、下の空中に於いて住せり、我等は佛に從ひて聞きたてまつれば、此の事に於いて疑無し、願はくば佛未來の爲に、演說して開解せしめたまへ、若此の經に於いて疑を生じて信ぜざること有る者は、即ち當に惡道に墮つべし、願はくば今爲に解說したまへ、是の無量の菩薩をば、云何にしてか少時に於いて敎化して發心せしめて、不退の地に住せしめたまへる。

第十六　如來壽量品（本論其二―本佛の顯現　良醫の譬）

解題　前段涌出品に於て已に龍の半身は現れ、師、住處、因緣の三疑又朧げ乍ら知ることを得た、所謂る師は釋迦尊、住處は下方の空中、因緣は答への中には無いが、序論中に此等の大菩薩が、寶塔品已來の大問題たる、娑婆世界にて法華弘通の大責任を帶びるといふことが說いてあるから、大體見當が付かぬでもない、而し何れも朧げである、然して其の三疑を明瞭にするが爲に、如來の壽命の數量を說くから、如來壽量品といふのである。

大筋　迹門分の中堅方便品は、三止三請で幕が開いた、本門の肝心否釋尊出世の本懷たる、一大事の壽量品は三誡三請の上に、重請重誡を加へられて始めて御說き出しになつた、佛は嚴として仰せらるゝには、一切世間の人々は我れ今度始めて覺を得たるものと思へるなら ん、父少子老の譬を以て之れを證するに足る、然れども實に成佛したるは無量無邊の過去、久遠の昔である、譬へていはゞ、五百千萬億那由佗の三千世界を微塵と摧き、東の方五百千萬億の世界を越ゆる毎に一塵を下し、遂に全く微塵を盡くさん時、經來れる總ての世界を、更に抹して塵となし、其の一塵を一劫とせん、我れ成佛してより已來、復此れに過ぎたること百千萬億倍である、而して今日迄常に此の娑婆世界に在て敎化示導し、時に釋迦（自身）と名乘り、時に彌陀（他身）等と現じた（第一疑明了）、然り常住の佛陀も衆生敎化の爲に或は生れ或は滅す、而し乍ら是れ方便のみ、豈如來に生死の煩ひあらんや、此土は實に安穩の處、外に去つて求むること能はざる勝妙の淨土である（第二疑明了）、然れども常住の上に無常の生死を示す所以は、一に如來の大悲に基す、譬ば多くの子女を有る良醫あり、事に觸れて旅に出づ、子等誤て毒藥を服して苦悶す、恰もよし父は歸り來つた、早速最良最善を盡して一の解毒劑を與へた、直に服せるものは頓に苦痛

を去つたが、毒の爲に正氣を失へるものは、好からずとして服することをしない、父の醫師は止を得ず、方便を案じて再び旅に赴き、而して途より使を遣して「汝が父死せり」と告げしめた、病める子は驚き悲觀を懷いて憂惱したが、それが爲に却て本心を覺醒し、父の去るに臨み止め置きたる枕邊の藥を取つて服したるに、不思議や毒の病悉く癒えた、これを聞きし父は急ぎ歸り來りて父子相抱いて喜んだ、といふが如きものである、我は決して死するものでないが佛常にありと見ば渴仰の念淺く從つて敎を用ゆること薄し、故に方便を以て滅を示し、後來の衆生の爲に使を遣すものである、即ち上行等の大菩薩の使命漸く明らかとなつた（第三疑明了）。

已上大略であるが、其中に尤も注意すべきものとして茲に補說するは、本文中に『常ニ住シテ不レ滅』といふ文字がある、これ當品の眞髓であつて、若し之れが無かつたならば、殆ど全價値を失墜するといつてもよいのである、何故かといへば、たゞ單に無量無邊の昔よりといへば、彼の無量壽佛と譯する阿彌陀如來と同一のものとなり終るからである、彼れ彌陀の無量壽は實は無量ではない有量である、けれども凡夫人の心力の及ばない程の過去を有して居るから、之れを無量壽といつたのである、今佛釋尊は否らず、實に無始の古佛、常住不滅の壽命を

有して居る、彼れは觀經に於て十劫正覺を說き、これは五百千萬億那由佗阿僧祇と明す、彼の三部經に常住不滅の文義俱になく、此經に文義朗然とある、即ち彼は有始有終の權佛、常住の粧をなせる無常の水月に過ぎず、此は無始無終の實佛、常住不滅の天月である。

次ぎに之の常住不滅は獨り釋尊の常住不滅でなくして靈魂の不滅と見ることが出來る、たゞ彼れにありては其の靈魂は有德の光りを有し、極樂の世界に常在して居るのであるが、我等の靈魂は展轉して苦より苦に、冥より冥に、薄德の醜態を連續して居るのである、かく苦樂、明闇の差はあるが、靈魂其者の、斷絕することなき生活は彼此俱に等しいのである、此を以て當品を靈魂不滅論と見做すことを得るのである。

第三に教義上といふよりも寧ろ布教上の參考であるが近來の日蓮各門下が、頭から日蓮主義は樂天的の樣に主張して居るが、當品にての覺醒は悲觀が基となつて次に樂天的生活を來したのであるから、壽量品を尊重し、而も之れに忠實なる日蓮主義者は大なる樂觀は必ず先づ大なる悲觀より出發することを忘れてはならぬ。

日蓮上人（壽量品得意抄）曰一切經ノ中ニ此壽量品マシマサズバ天無ニ日月一國ニ大王無ク山海ニ玉ナク人ニ魂無カランガ如シ又（觀心本尊ノ抄）曰自ニ至過去大通佛法華經ニ乃現在ノ華嚴經乃至迹門十四品涅槃經等ノ一代五十餘年ノ

妙法蓮華經如來壽量品第十六

爾の時に佛、諸の菩薩、及び一切の大衆に告たまはく、諸の善男子、汝等當に、如來の誠諦の語を信解すべし。復大衆に告げたまはく、汝等當に、如來の誠諦の語を信解すべし。

又復、諸の大衆に告げたまはく、汝等當に、如來の誠諦の語を信解すべし。

是の時に菩薩大衆、彌勒を首と爲して、合掌して佛に白して言さく、世尊、唯願はくば之を說きたまへ。我等當に、佛の語を信受したてまつるべし。

諸經十方三世諸經ノ微塵ノ經々ハ皆壽量ノ序分也

又（開目抄）曰カヴテカヘリ見レバ華嚴經ノ臺上十方阿含經ノ小釋迦方等般若ノ金光明經ノ阿彌陀經ノ大日經等ノ權佛等ハ此壽量ノ佛ノ天月シバラク影ニシテ大小ノ器ニシテ浮ベ給フ諸宗ノ學者等近クノ自宗ニ迷ヒ遠クバ法華經ノ壽量品ヲ知ラズ水中ノ月ニ實月ノ想ヲナシ或ハ入テ取ラント思ヒ或ハ繩ヲツケテツナギ止メントス天台（天台宗元祖）云天月ヲ識ラズ但池月ヲ觀ル等云云

阿惟越致地不退ノ位本門壽量教主獲第の事日蓮上人（教行證御書）曰

是の如く三たび白し已りて、復言さく、唯願はくば之を說きたまへ、我等當に佛の語を信受したてまつるべしと。

爾の時に世尊、諸の菩薩の、三たび請じて止まざることを知しめして、之に告げて言はく、

汝等諦かに聽け、如來祕密神通の力を。一切世間天人、及び阿脩羅は皆「今の釋迦牟尼佛、釋氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり」と謂へり。然るに善男子、我實に成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由佗劫なり。譬へば、五百千萬億那由佗阿僧祇の三千大千世界を、假使人有りて、抹して微塵と爲して、東方五百千萬億那由

佗阿僧祇の國を過ぎて、乃ち一塵を下し、是の如く東に行きて是の微塵を盡さんが如き、諸の善男子、意に於いて云何、是の諸の世界は、思惟し校計して、其の數を知ることを得べしや不や。

彌勒菩薩等、倶に佛に白して言さく、

世尊、是の諸の世界は、無量無邊にして、算數の知る所に非ず。亦心力の及ぶ所に非ず。一切の聲聞、辟支佛、無漏智を以つても、思惟して其の限數を知ること能はじ。我等阿惟越致地に住すれども、是の事の中に於いては、亦達せざる所なり。世尊、是の如き諸の世界は無量無邊

日蓮ガ弟子等ハ臆病ニテハ叶フベカズ彼彼ノ經々ト法華經ト勝劣淺深成佛不成佛チ判ゼン時爾前迹門ノ釋尊ナリトモ物ノ數ナラズ何況ヤ其以下ノ等覺ノ菩薩チヤマシテ權宗ノモノドモチヤ

爾の時に佛、大菩薩衆に告げたまはく、諸の善男子、今當に分明に、汝等に宣語すべし。是の諸の世界の、若は微塵を著き、及び著かざる者を盡く以つて塵と爲して、一塵を一劫とせん。我成佛してより已來、復此に過ぎたること、百千萬億那由佗阿僧祇劫なり。是より來、我常に此の娑婆世界に在りて、說法教化す。亦、餘處の百千萬億那由佗阿僧祇の國に於いても衆生を導利す。諸の善男子、是の中間に於いても我然燈佛等と說き、又復、其涅槃に入ると言ひき。是の如きは、皆方便を以つて分別せしなり。諸の善男子、若衆生有りて我が所に來至するには、我佛眼を以つて、其の信等の諸根の利鈍を觀じて、應に度すべき所に隨ひて、處處に自ら名字の不同、年紀の大小を說き、亦復、現じて當に涅槃に入るべしと言ひ、又、種種の方便を以つて、微妙の法を說きて、能く衆生をして歡喜の心を發さしめき。

日蓮上人（日眼女御返事）曰、法華經ノ壽量品云或說己身或說他身等云云東方ノ善德佛中央ノ大日如來十方ノ諸佛過去ノ七佛三世ノ諸佛上行菩薩等文殊師利舍利

諸の善男子、如來諸の衆生の、小法を樂へる德薄垢重の者を見て、是の人の爲に、我少くして出家し、阿耨多羅三藐三菩提を得たりと說く。然も我、實に成佛してより已來、久遠なること斯の如し。但方便を以つて、衆生を教化して佛道に入らしめんとして、是の如き說を作す。諸の善男子、如來の演ぶる所の經典は、

皆衆生を度脫せんが爲なり。或は己身を說き、或は佗身を說き、或は己身を示し、或は佗身を示し、或は己事を示し、或は佗事を示す。諸の言說する所は、皆實にして虛しからず。所以は何ん。如來は如實に、三界の相を知見す。生死の、若は退、若は出有ること無く、亦在世、及び滅度の者無し。實に非ず虛に非ず。如に非ず異に非ず。三界の三界を見るが如くならず。斯の如きの事、如來明かに見て、錯謬有ること無し。諸の衆生、種種の性、種種の欲、種種の行、種種の憶想分別有るを以ての故に、諸の善根を生ぜしめんと欲して、若干の因緣、譬諭、言辭を以つて、種種に法を說く。

弗等梵天王第六天ノ魔王釋提桓因王曰天月天明星乃至何レカ教主釋尊ナラザル大菩薩モ其本地大幡大神八照尊ハ教主釋尊也例セバ釋尊ハ天ノ一月諸佛ニ菩薩等ハ萬水浮ベル影ナリ

所作の佛事、未だ曾て暫くも廢せず。是の如く、我成佛してより已來、甚だ大いに久遠なり。壽命無量阿僧祇劫なり。常住にして滅せず。諸の善男子、我本菩薩の道を行じて成ぜし所の壽命、今猶未だ盡きず。復上の數に倍せり。然るに今、實の滅度に非ざれども、而も便ち、唱へて當に滅度を取るべしと言ふ。如來、是の方便を以つて衆生を敎化す。所以は何ん。若佛、久しく世に住せば、薄德の人は善根を植ゑず、貧窮下賤にして、五欲に貪著し、憶想妄見の網の中に入りなん。若し如來、常に在りて滅せざるを見ば、便ち憍恣を起して厭怠を懷き難遭の想、恭敬の心を生ずること能はじ、是の故に如來、

大僧正日扇釋迦佛のぼさつでましゝ其の昔しやばの修行は南無妙法蓮華經

方便を以つて說く。比丘當に知るべし。諸佛の出世には、値遇すべきこと難し。所以は何ん。諸の薄德の人は無量百千萬億劫を過ぎて、或は佛を見る有り、或は見ざる者あり。此の事を以つての故に、我是の言を作す。『諸の比丘、如來は見ることを得べきこと難しと。』斯の衆生等、是の如き語を聞きては、必ず當に難遭の想を生し、心に戀慕を懷き、佛を渴仰して、便ち善根を種うべし。是の故に如來、實に滅せずと雖も、而も滅度すと言ふ。又善男子、諸佛如來は、法皆是の如し。衆生を度せんが爲なれば、皆實にして、虛しからず。譬へば、良醫の智慧聰達にして、明かに方藥に練し、善く衆病を治す。其の人、諸の子息多し。若は十、二十、乃至百數なり。事の緣有るを以つて、遠く餘國に至りぬ。諸子、後に佗の毒藥を飲む。藥發して、悶亂して地に宛轉す、是の時に其の父、還り來りて家に歸りぬ。諸子毒を飲みて、或は本心を失へる、或は失はざる者あり。遙かに其の父を見て、皆大いに歡喜し、拜跪して問訊すらく、善く安穩に歸りたまへり。我等愚癡にして、誤りて毒藥を服せり。願はくば救療せられて、更に壽命を賜へと。父、子等の苦惱すること是の如くなるを見て、諸の經方に依りて、好き藥草の色香美味、皆悉く具足

せるを求めて、擣篩和合して、子に與へて服せしむ。而して是の言を作さく、

此の大良藥は、色香美味、皆悉く具足せり。汝等服すべし。速かに苦惱を除きて、復衆の患無けんと。

其の諸子の中に、心を失はざる者は、此の良藥の色香、俱に好きを見て、即便之を服するに、病盡く除こり愈えぬ。餘の心を失へる者は、其の父の來れるを見て、亦歡喜し、問訊して病を治せんことを求索むと雖も、然も其の藥を與ふるに、肯て服せず。所以は何ん。毒氣深く入りて、本心を失へるが故に、此の好き色香ある藥に於いて、美からずと謂へり。父是の念を作く、

日蓮上人（觀心本尊抄）曰今ノ遣使還告ハ地涌（上行菩薩ノ事）也是好良藥トハ壽量品ノ肝要名體宗用教ノ南無妙法蓮華經是也

此の子愍むべし。毒に中られて、心皆顚倒せり。我を見て、喜びて救療を求索むと雖も、是の如き好き藥を肯へて服せず。我今當に方便を設け、此の藥を服せしむべし。

即ち是の言を作さく、

汝等當に知るべし。我今衰老して、死の時已に至りぬ。是の好き良藥を、今留めて、此に在く汝取りて服すべし。差えじと憂ふること勿れと。是の教を作し已りて復佗國に至りて、使を遣して還りて告ぐ、汝が父已に死しぬと。

是の時に諸子、父背喪せりと聞きて心大いに憂惱して是の念を作さく、

若父在しなば、我等を慈愍して、能く救護せられまし。今者、我を捨てて遠く佗國に喪りたまひぬ。自ら惟れば、孤露にして復恃怙無し。常に悲感を懷きて、心遂に醒悟しぬ。乃ち此の藥の色香味美なるを知りて、即ち取りて之を服するに、毒の病皆愈ゆ。其の父、子悉く已に差ゆることを得つと聞きて、尋いで便ち來り歸りて、咸く之に見えしめんが如し。

諸の善男子、意に於いて云何。頗人の、能く此の良醫の虛妄の罪を說く有らんや不や。『不なり世尊。』佛の言はく、

我も亦是の如し。成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由佗阿僧祇劫なり。衆生の爲の故に、方便力を以つて當に滅度すべしと言ふ。亦能く法の如く、我が虛妄の過を說く者有ること無けん。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

我佛を得てより來、經たる所の諸の劫數、無量百千萬億載阿僧祇なり、常に法を說きて、無數億の衆生を敎化して、佛道に入らしむ、爾りしより來無量劫なり、衆生を度せんが爲の故に方便して涅槃を現ず、而も實には滅度せず、常に此に住して法を說く、我常に此に

日蓮上人（一谷入道書）曰婆婆世界ハ五百塵點劫ヨリ已來教主釋尊ノ御所領也大地虛空山海草木一分モ佗佛ノ有ナラズ

住すれども、諸の神通力を以つて、顛倒の衆生をして、近しと雖も而も見えざらしむ、衆我が滅度を見て、廣く舍利を供養し、咸く皆戀慕を懷きて、渴仰の心を生ず、衆生既に信伏し、質直にして意柔輭に、一心に佛を見たてまつらんと欲して、自ら身命を惜まず、時に我及び衆僧、俱に靈鷲山に出づ、我時に衆生に語る、常に此に在りて滅せず、方便力を以つての故に滅不滅有りと現ず、餘國に衆生の恭敬し信樂する者有らば、我復彼の中に於いて爲に無上の法を說く、汝等此を聞かずして、但我滅度すと謂へり、我諸の衆生を見るに、苦海に沒在せり、故に爲に身を現ぜずして、其を

康資王母鷲の山へだつる雲や深からむ

常にすむなる月を見ぬかな

日蓮上人（四條殿返事）曰一切衆生南無妙法蓮華經ト唱フルヨリ外ノ遊樂ナキ也又云衆生ノ所ニ遊樂ースル云云此文ニ自受法樂ニアラズヤ乃至タダ女房ト酒ウチノミテ南無妙法蓮華經ト唱ヘ給ヘ苦

して渴仰を生ぜしむ、其の心の戀慕するに因りて、乃ち出でて爲に法を說く、神通力是の如し、阿僧祇劫に於いて、常に靈鷲山及び餘の諸の住處に在り、衆生劫盡きて、大火に燒かるると見る時も、我が此の土は安穩にして、天人常に充滿せり、園林諸の堂閣、種種の寶をもつて莊嚴し、寶樹華果多くして、衆生の遊樂する所なり、諸天天鼓を擊ちて、常に衆の伎樂を作し、曼陀羅華を雨して、佛及び大衆に散ず、我が淨土は毀れざるに而も衆は燒け盡きて、憂怖諸の苦惱、是の如き悉く充滿せりと見る、是の諸の罪の衆生は、惡業の因緣を以つて、阿僧祇劫を過ぐれども三寶の名を聞

チバ苦トサトリ樂ナバ樂トヒラキ苦樂トモニ思ヒ合ヒテ南無妙法蓮華經トウチ唱ヘ居サセ給ヘコレ豈自受法樂ニアラズヤ

又（觀心本尊抄）曰今本時ノ娑婆世界ハ三災（火、水、風）ナ離レ四劫（成、住、壞、空）ナ出タル常住ノ淨土也

又（法華取要抄）曰此土ノ我等衆生ハ五百塵點劫已來教主釋尊ノ愛子ナリ不孝ノ失ニ依ツテ今ニ于マテ覺知セズト雖佗方ノ衆生ニハ似ルベカラズ

前大納言爲家

鶯の山蔓ぬ月を頼むかな年經し法の水くきの跡

かず、諸の有ゆる功德を修し、柔和質直なる者は則ち皆我が身、此に在りて法を說くと見る、或時は此の衆の爲に佛の壽無量なりと說く、久しくして乃し佛を見たてまつる者は、爲に佛には値ひ難しと說く、我が智力是の如し、慧光照すこと無量にして、壽命無數劫なり久しく業を修して得る所なり、汝等智有らん者、此に於いて疑を生ずること勿れ、當に斷じて永く盡さしむべし、佛語は實にして虛しからず、醫の善き方便をもつて、狂子を治せんが爲の故に、實には在れども而も死すと言ふに、能く虛妄を說くもの無きが如く、我も亦爲世の父、諸の苦患を救ふ者なり、凡夫の顚倒せるを爲て、實には在れども而も滅すと言ふ、常に我を見るを以つての故に、而も憍恣の心を生じ、放逸にして五欲に著し、惡道の中に墮ちなん、我常に衆生の、道を行じ道を行ぜざるを知りて、應に度すべき所に隨ひて爲に種種の法を說く、毎に自ら是の念を作さく、何を以つてか衆生をして無上道に入り速かに佛身を成就することを得しめんと。

第十七　分別功德品（本論其三――菩薩の授記　通論其一――四信五品の事）

解題　壽量品の法門たる佛壽の久遠（常住不滅）なることを聞いて、如何なる功德を得たるか、又後來の世の衆生が此の法門を信受したならば、如何なる利益を得るかを說ける品なるが故に、分別功德品といふのである、それで現在の人々が得たる功德を校量する一段が本門の授記であつて、此の授記が終る所で本論の結了を告ぐるのである、又後來の事に及ぶのは、末代の弘通の用意であるから、此處よりして通論と變るのである。

大筋　**本論**――佛壽の長遠なることを聞いた大衆は、非

常なる眞理を直觀することが出來た、それは到底迦門方便品の諸法實相所でない、佛は其の巨益を彌勒菩薩に御告げになる、（一）無生法忍を得たものが六百八十萬億云云（二）聞持陀羅尼を得たる菩薩の數が前者に千倍す（三）樂說無碍辯才を得たるもの（四）旋陀羅尼を得たる菩薩各一世界微塵の數程ある（五）不退の法輪を說くもの三千世界の微塵の數乃至（十一）一生に無上正覺を得べきもの四天下の微塵の數ほどもある（十二）無上菩提の心を發したものが八世界の塵の數位ある、と十二部に分ちて御說きになる、さすがに本門分の授記段丈あつて廣く且つ多い、それに留意すべき肝要の處は、迦門の授記は何れも無量無邊百千萬億劫を過ぎてといふ前途頗る遼遠であるに反して、本門は現に無生法忍を得たとか、聞持陀羅尼を得たとか、又は八生で正覺を得る、一生で佛になるといふ極く近い話だ、彼は只今迄二乘は成佛不可能のものなりとあつたのを打破つた丈の事である、何日か出來るというた樣なものである、それでも爾前經に比すれば大變な相違であるが、本門に對向すると又天地の相違である、言はゞ迦門は理論上之れを許し、本門は事實上之れを證するといふ差があるのである。

偖十二段の授記が終ると、虛空より妙華を雨らし、諸種の妙香水雨と下り、空中には天の鼓自らに鳴り深遠

の妙聲傳はる等不思議な數々が起る、これ又迹門の授記段になかつた所で、本門の勝妙を證する一である、そこで歡喜に滿ちた彌勒菩薩が立つて此の場の有樣を形容し佛の大恩に感謝の辭を捧げる。

通論――彌勒の感謝を御容れになつた佛陀は、又彌勒に仰せ遊ばすには、佛の壽命の長遠なることを聞いて、一念も信受するものは、八十萬億那由佗劫の長き間、布施、持戒、忍辱、精進、禪定の五波羅密の修行をするよりも、百千萬億倍以上の功德がある（一信）若し進んで其の義趣を解するものは、如來の智惠を起せる人（二信）況んや廣く人の爲に其の義を說くものは、一切種智を生じ（三信）

深心に信解するものは當に佛を見奉り、又娑婆世界の即寂光淨土なることを觀破する人である、と御說きになる、之れを現在の四信と稱し、一念信解、略解言趣、廣爲他說、深信觀成と次第に名が附せられてある、引續いて如來の滅後の得益を述ぶるを、滅後の五品といふ、即ち經の文に、如來ノ滅後ニ此ノ經ヲ聞イテ毀訾セズシテ隨喜ノ心ヲ起サンとあるが第一の初隨喜品、現在の初信に相當する、佛の敎に隨つて得益するを喜ぶといふ位である、何ニ況ンヤ之レヲ讀誦受持セン者とあるが第二讀誦品である、之は現在の初信に包容され得るもので、彼れは現在直に佛音を聞くから讀誦の要がない、これは滅

後であるから文字の經卷が存する、それで此の階級が出來するのである、若シ自ラ書キ若ハ人ヲシテ書カシムとあるが第三說法品で、現在二信略解言趣に當る、略解言趣はたゞ單に解するのみでなく、人の爲に說くことをも接して居る、即ち次の廣爲他說に對して略說なる義をも含まれて居るのである、それ故に說法品は略解言趣に相當することが首肯されるであらう、能ク是ノ經ヲ持チ兼テ布施等ヲ行ゼバ云云は第四兼行六度品である、經の文に兼テとあるから此の經を信じ他の爲に說く傍ら六度の修行をするといふのである、三信廣爲他說に當る、若シ人是ノ經ヲ讀誦シ受持シ他人ノ爲ニ說キ云云は第五正行六度品である、兼行六度の名に對して正行の名を附したので、前者よりは更に廣く修行するの意を取つたのである、四信深信觀成に當る。（隨喜功德品大意參照）

全體六度といふのは一般に六波羅蜜といふので知られて居る、波羅蜜を譯すれば「到彼岸」又は「度」となる、何れもワタルの義で菩薩が生死の此の岸より寂靜の彼の岸に到達せんとする方法である、その方法が六通ある。それで六度といふのである、これは單に法華經を信ずる或は他に信ぜしむるといふ丈でなく、實際上百般の問題に觸れて修行することで、名目は六種であるが內容を分つと無量無邊となる、例せば第一の布施の行でも金を與へ

法を施す計りでない、提婆達多品にある樣に、國城、妻子、奴婢僕從等の附屬は勿論、頭目、髓腦、身肉、手足乃至軀命（身心ノコト）の自身をも法の爲に提供して少しも惜まないのである、されば餘程の決心の深く堅い菩薩でなくては出來ぬ修行である、故に最後の位置を占めて居る、處で讀者は第一信に於て五波羅蜜の修行を蔑如した樣な經文を見、今之れを最後身の菩薩の修行の樣に說くを聞いて矛盾の感が起るであらう、御尤の事であるから簡單に說明を加へやう。

第一彼れにありては初心である、先づ根本的要素を獲得せねばならぬ、而して根本的要素とは所謂信仰で、これが佛道修行の單位且中心となつて居る、これを失うた六波羅蜜は根のなき巨樹の樣なもので、美しき果實を結ぶことは出來ない、換言すれば、第一信を離れざる範圍內に於て六度の修行は有效である、故に初に之れを却け後に之れを容れたのである、彼の大木の移植を行ふ時、枝葉を悉く拂うて些の未練をも加へない、これ枝葉の不用なるに非ず大木の生命を尊重するが爲である、されば後日根定まり生命全きを得たる時、枝葉の繁茂を希ふのである。

第二に、彼れにありては第六般若波羅蜜を除いて居る、般若は智惠と譯し、法華大悟の修行と同一なるが故であ

る。

圓教ノ修行ニ五十二ノ階級ヲ立テ其ノ頂上ヲ佛果トナス、五十二位トハ十信十住十行十回向十地等覺妙覺ナリ然シテ初ノ十信ニテ見惑八十八、思惑八十一及ビ塵沙ノ煩惱ヲ斷ジ次ノ十住ヨリ等覺ニ至ル四十一位ニシテ無明ノ煩惱ヲ斷ジ盡シ中道實相ヲ證得シ終リ第五十二位ノ妙覺ニ至

妙法蓮華經分別功德品第十七

爾の時に大會、佛の、壽命の劫數長遠なること、是の如くなるを說きたまふを聞きて、無量無邊阿僧祇の衆生、大饒益を得つ、時に世尊、彌勒菩薩摩訶薩に告げたまはく、

阿逸多、我、是の如來の壽命長遠なるを說く時、六百八十萬億那由佗恆河沙の衆生、無生法忍を得。復、千倍の菩薩摩訶薩有りて、聞持陀羅尼門を得。復、一世界微塵數の菩薩摩訶薩有りて、樂說無礙辯才を得。復、一世界微塵數の菩薩摩訶薩有りて、百千萬億無量

ル妙覺ハ即チ極位佛果ナリ今分別功德品ニ於テ授記ヲ得ルノ十二種ハ此ノ五十二位ニ配當シテ解スルコトヲ得ベシ

十信—發阿耨菩提心

十住—無生法忍

十行—聞持陀羅尼

十回向—樂說無碍辯才

十地—初地—旋陀羅尼

二地—轉不退法輪

三地—轉淸淨法輪

四地—八生得阿耨菩提

五地—（七生）

六地—（六生）

七地—（五生）

（經文ニハ略サレタルヲ以テ茲ニ之レヲ補出ス）

八地—四生得阿耨菩提

の旋陀羅尼を得。復、三千大千世界微塵數の菩薩摩訶薩有りて、能く不退の法輪を轉ず。復、一千中國土微塵數の菩薩摩訶薩有りて、能く淸淨の法輪を轉ず。復、小千國土微塵數の菩薩摩訶薩有りて、八生に、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。復、四四天下微塵數の菩薩摩訶薩有りて、四生に、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。復、三四天下微塵數の菩薩摩訶薩有りて、三生に、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。復、二四天下微塵數の菩薩摩訶薩有りて、二生に、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。復、一四天下微塵數の菩薩摩訶薩有りて、一生に、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。

復、八世界微塵數の衆生有りて、皆、阿耨多羅三藐三菩提の心を發しつ。

佛、是の諸の菩薩摩訶薩の、大法利を得ることを說きたまふ時、虛空の中より、曼陀羅華、摩訶曼陀羅華を雨して、以つて無量百千萬億の寶樹の下の、師子座の上の諸佛に散じ、幷びに七寶塔中の、師子座の上の釋迦牟尼佛、及び久滅度の多寶如來に散じ、亦、一切の諸の大菩薩、及び四部の衆に散ず。又、細抹の栴檀、沈水香等を雨し、虛空の中に於いて、天鼓自ら鳴りて、妙聲深遠なり。又、千種の天衣を雨し、諸の瓔珞、眞珠瓔珞、摩尼珠瓔珞、如意珠瓔珞を垂れて、九方に徧うせり。衆寶の香爐に、

九地―同上―三生
十地―同上―二生
等覺―同上―一生
妙覺―佛陀
無生法忍―無生無滅ノ中道實相ノ妙理ヲ證得スル位
聞持陀羅尼三陀羅尼ノ一、一切ノ音聲言語ヲ悉ク憶持シテ忘ルヽコトナキ功德樂說無礙辯才樂欲ニ隨ヒテ

無價の香を燒きて、自然に周く至りて大會に供養す。一の佛の上に、諸の菩薩有りて、旛蓋を執持して、次第に上りて梵天に至る。是の諸の菩薩、妙なる音聲を以つて、無量の頌を歌ひて、諸佛を讃歎したてまつる。爾の時に彌勒菩薩、座より起ちて、偏へに右の肩を袒にして合掌し、佛に向ひたてまつりて、偈を說きて言さく、

佛希有の法を說きたまふ、昔より未だ曾て聞かざる所なり、世尊は大力有して壽命量るべからず、無數の諸の佛子、世尊の分別して法利を得る者を說きたまふを聞きて、歡喜身に充徧す、或は不退地に住し或は陀羅尼を得、或は無礙の樂說萬億の旋總持あり、或は大千

自在ニ說法スル辯才ナリ
施陀羅尼旋轉分別シテ塵沙ノ煩惱ヲ破リ恒沙ノ佛法ヲ顯スヲ云フ
轉不退法輪此ノ位ヨリシテ全ク不退ノ位ニ入ル
九方四方（東西南北）四維（乾坤巽艮）及ビ中央
旋總持旋陀羅尼ノ譯

界微塵數の菩薩有りて、各各に皆能く不退の法輪を轉ず、復中千界微塵數の菩薩有りて、各各に皆能く清淨の法輪を轉ず、復小千界微塵數の菩薩有りて、餘り各八生在りて、當に佛道を成ずることを得べし、或は四三二、斯の如き四天下、微塵數の菩薩有りて、數の生に隨ひて成佛せん、或は一四天下微塵數の菩薩、餘り一生在ること有りて當に一切智を得べし、是の如き等の衆生、佛壽の長遠なることを聞きて、無量無漏の淨の果報を得、復八世界微塵數の衆生有りて、佛の壽命を說きたまふを聞きて、皆無上の心を發しつ、世尊無量の不可思議の法を說きたまふに、多く饒益する所

釋梵王、帝釋天大梵天王の事

有ること虚空の無邊なるが如し。天の曼陀羅摩訶曼陀羅を雨して、釋梵恆沙の如く無數の佛土より來れり、栴檀沈水を雨して繽紛として亂れ墜つること、鳥の飛びて空より下るが如くにして諸の佛に供散し、天鼓虚空の中にして自然に妙聲を出し、天衣千萬億旋轉して來下し、衆寶の妙なる香爐に、無價の香を燒きて、自然に悉く周徧して諸の世尊に供養す、其の大菩薩衆は、七寶の旛蓋の高妙にして萬億種なるを執りて、次第に梵天に至る、一一の諸佛の前に寶幢に勝旛を懸けたり、亦千萬の偈を以つて、諸の如來を歌詠したてまつる、是の如き種種の事、昔より未だ曾て有らざる所なり、

無上の心を助ぐ　ニテ本門ノ本論ハ終リヲ告ゲ爾時ニ佛ヨリ以下ハ通論ニ還ル　阿逸多以下ハ四信ヲ説ク先ヅ初ニ一念信解

五波羅蜜―波羅蜜、到彼岸(度)ト譯ス　檀―布施　尸羅―持戒

佛壽の無量なることを聞きて一切皆歡喜す、佛の名十方に聞えて、廣く衆生を饒益したまふ、一切善根を具して以つて無上の心を助く。

爾の時に佛、彌勒菩薩摩訶薩に告げたまはく、阿逸多、其衆生有りて、佛の壽命の長遠なること是の如くなるを聞きて、乃至能く一念の信解を生ぜば、所得の功德限量有ること無けん、若善男子、善女人有りて、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、八十萬億那由佗劫に於いて、五波羅蜜を行ぜん。檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毗梨耶波羅蜜、禪波羅蜜なり、般若波羅蜜をば除く。是の功德を以つて、前の功德に比ぶるに、百分、千分、百

羼提―忍辱
毗梨耶―精進
禪―靜慮（定）
般若―智惠

千萬億分にして其の一にも及ばず、乃至算數譬諭も知ること能はざる所なり。若善男子、是の如き功德有りて、阿耨多羅三藐三菩提に於いて退すといはば、是の處有ること無けん。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

若人佛慧を求めて、八十萬億、那由佗の劫數に五波羅蜜を行ぜん、是の諸の劫の中に於いて、佛、及び緣覺の弟子、幷びに諸の菩薩衆に布施し供養せん、珍異の飲食上服と臥具と栴檀とをもつて精舍を立て、園林を以つて莊嚴せる、是の如き等の布施、種種に皆微妙なる、此の諸の劫數を盡して以つて佛道に回向せん、若復禁戒を持ちて、清淨にして缺漏無く、無上道の諸佛の歎じたまふ所なるを求めん、若復忍辱を行じて調柔の地に住し、設ひ衆の惡來り加ふとも其の心傾動せざらん、諸の有ゆる得法の者の、增上慢を懷ける、斯に輕しめ惱されん、是の如きをも亦能く忍ばん、若復勤めて精進し、志念常に堅固にして、無量億劫に於いて一心に懈怠せざらん、又無數劫に於いて、空閑の處に住して、若は坐し若は經行し、睡を除きて常に心を攝めん、是の因緣を以つての故に能く諸の禪定を生じ、八十億萬劫に安住して心亂れず、此の一心の福を持ち

諸釋の中の王　多クノ釋迦

て無上道を願求す、我一切智を得て、諸の禪定の際を盡さんと、是の人百千萬億の劫數の中に於いて、此の諸の功德を行ずること上の所說の如くならん、善男女等有りて、我が壽命を說くを聞きて、乃至一念も信ぜば、其の福彼に過ぎたらん、若人悉く一切の諸の疑悔有ることなくして、深心に須臾も信ぜん、其の福此の如くなることを爲、其の諸の菩薩の無量劫に道を行ずる有りて、我が壽命を說くを聞きて、是則ち能く信受せん、是の如き諸人等、此の經典を頂受して、我未來に於いて、長壽にして衆生を度せんこと今日の世尊の諸釋の中の王として、道場にして師子吼し、法を說きたまふに畏るる所無きが如く、我等も未來世に一切に尊敬せられて、道場に坐せん時、壽を說くこと亦是の如くならんと願せん、若深心有らん者、清淨にして質直に、多聞にして能く總持し、義に隨ひて佛語を解せん、是の如き諸人等、此に於いて疑有ること無けん、又阿逸多、若佛の壽命の長遠なることを聞きて、其の言趣を解する有らん。是の人の所得の功德、限量有ること無くして、能く如來の無上の慧を起さん。

族ノ中ノ最モ尊キ人ノ、義釋尊ト同ジ

又阿逸多以下ハ第二信、略解言趣

何に況や以下第三信、廣爲他說

何に況や、廣く是の經を聞き、若は人をしても聞かしめ、若は自らも持ち、若は人をしても持たしめ、若は自らも書き、若は人をしても書かしめ、若は華香、瓔

阿逸多若善男子以下ハ第四信、深信觀成

八道八方ノ道路、即チ八正道（正見、正語、正思惟、正業、正命、正精進、正念、正定）ヲ意味ス

珞、幢旛、繒蓋、香油、蘇燈を以つて、經卷に供養せんをや。是の人の功德無量無邊にして、能く一切種智を生ぜん。

阿逸多、若善男子、善女人、我が壽命の長遠なるを說くを聞きて、深心に信解せば、則ち爲佛、常に耆闍崛山に在して、大菩薩、諸の聲聞衆の、圍繞せると共に說法するを見、又此の娑婆世界、其の地瑠璃にして、坦然平正に、閻浮檀金、以つて八道を界ひ、寶樹行列し、諸臺樓觀、皆悉く寶をもつて成じて、其の菩薩衆、咸く其の中に處せるを見ん。若能く是の如く觀ずること有らん者は、當に知るべし。是を深信解の相と爲く。

又復如來の滅後以下滅後ノ五品ヲ說キ先ツ第一隨喜品

何に況や讀誦し以下第二讀誦品

四事衣服、飲食、臥具、湯藥ノ四

又復、如來の滅後に、若是の經を聞きて、毀誓せずして隨喜の心を起さん。當に知るべし。已に深信解の相と爲く。

何に況や讀誦し、受持せん者をや。斯の人は、即ち爲如來を頂戴したてまつるなり。阿逸多、是の善男子、善女人は、我が爲に復塔寺を起て、及び僧坊を作り、四事を以つて衆僧を供養することを須たざれ。所以は何ん。是の善男子、善女人の、是の經典を受持し、讀誦せん者は、爲已に塔を起て、僧坊を造立し、衆僧を供養するなり。即ち爲佛舍利を以つて七寶の塔

を起て、高廣漸小にして梵天に至り、諸の旛蓋、及び衆の寶鈴を懸け、華香、嚶珞、抹香、塗香、燒香、衆鼓、伎樂、簫笛、箜篌、種種の舞戲ありて、妙なる音聲を以つて、歌唄讚頌するなり。則ち爲、已に無量千萬億劫に於いて、是の供養を作し已るなり。

阿逸多、若我が滅後に、是の經典を聞きて能く受持し、若は自ら書き、若は人をしても書かしむること有らんは、則ち爲僧坊を起立し、赤栴檀を以つて、諸の殿堂を作ること三十有二、高さ八多羅樹、高廣嚴好にして、百千の比丘、其の中に於いて止み、園林、浴池、經行禪窟、衣服、飲食、牀蓐、湯藥、一切の樂具、其の中に充滿せん。是の如き僧房、堂閣、若千百千萬億にして、其の數無量なる。此を以つて現前に、我及び比丘僧に供養するなり。是の故に我說く、如來の滅後に若受持し、讀誦し、佗人の爲に說き、若は自らも書きんは、復、塔寺を起て、及び僧房を造り、衆僧を供養することを須たざれ。

阿逸多以下第三說法品

八多羅樹　多羅ハ樹名ナリ重ト譯シ又ハ具多ト云フ形樓閣ノ如ク高サ七八丈ニ及ブ一多羅樹トシテ高度ナ示ス時ハ四丈九尺ニ當ルト云フ

經行　定ニ入レル間、時々運動ヲナス場所

況や復人有りて以下ハ第四兼行六度品ナリ

一心ハ禪定

況や復、人有りて、能く是の經を持ち、兼ねて布施、持戒、忍辱、精進、一心、智慧を行ぜんをや。其の德最勝にして、無量無邊ならん。譬へば、虛空の東西南北、四維上下、無量無邊なるが如く、是の人の功德も

亦復是の如し。無量無邊にして、疾く一切種智に至らん。

若人是の經を以下ハ第五正行六度品ナリ

若人、是の經を讀誦し受持し、佗人の爲に說き、若は自らも書き、若は人をしても書かしめ、復、能く塔を起て、及び僧房を造り、聲聞の衆僧を供養し讚歎し、亦百千萬億の讚歎の法を以つて、菩薩の功德を讚歎し、又、佗人の爲に、種種の因緣をもつて、義に隨ひて此の法華經を解說し、復、能く淸淨に戒を持ち、柔和の者と共に同止し、忍辱にして瞋無く、志念堅固にして、常に坐禪を貴び、諸の深定を得、精進勇猛にして、諸の善法を攝し、利根智慧にして、善く問難を答へん。

阿逸多、若我が滅後に、諸の善男子、善女人、是の經典を受持し讀誦せん者、復、是の如き諸の善功德有らんは、當に知るべし。是の人は、已に道場に趣き、阿耨多羅三藐三菩提に近きて、道樹の下に坐せるなり。阿逸多、是の善男子、善女人の、若は坐し、若は立ち、若は經行せん處、此の中には、便ち應に塔を起つべし。一切の天、人、皆應に供養すること、佛の塔の如くすべし。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

若我が滅度の後に、能く此の經を奉持せん、斯の人の

牛頭栴檀香木ノ名赤旃檀トモ云フ印度牛頭山（摩羅耶山）ニ多ク

福無量なること、上の所說の如し、是則ち爲、一切の諸の供養を具足し、舍利を以つて塔を起て、七寶をもつて莊嚴し、表刹甚だ高廣に、漸小にして梵天に至り寶鈴千萬億にして、風の動すに妙音を出す、又無量劫に於いて、此の塔に、華香諸の瓔珞、天衣衆の伎樂を供養し、香油蘇燈を然して、周帀して常に照明なり、惡世末法の時、能く此の經を持たん者は、則ち爲已に上の如く、諸の供養を具足するなり、若能く此の經を持たば、則ち佛の現在に牛頭栴檀を以つて、僧房を起てて供養し、堂三十二有りて、高さ八多羅樹、上膳妙なる衣服、牀臥皆具足し、百千の衆の住處、園林諸

須曼、瞻蔔ニ樹名其華香高ク遠ク及ブト云フ阿提目多伽龍華舡ト譯ス草ノ名、油トナスモノ

生ズト云フ

の浴池、經行及び禪窟、種種に皆嚴好にするが如し、若信解の心有りて、受持し讀誦し書き、若は復人をして書かしめ、及び經卷を供養し、華香抹香を散じ、須曼瞻蔔、阿提目多伽の、薰油を以つて常に之を然さん、是の如く供養せん者は、無量の功德を得ん、虛空の無邊なるが如く、其の福も亦是の如し、況や復此の經を持ちて、兼ねて布施し持戒し、忍辱にして禪定を樂ひ、瞋らず惡口せざらんをや、塔廟を恭敬し、諸の比丘に謙下して、自高の心を遠離し、常に智慧を思惟し、問難すること有らんに瞋らず、隨順して爲に解說せん、若能く是の行を行ぜば、功德量るべからず、若此の

大僧正慈鎭
いそぎゆく宿
にかはらぬ道
なれや
五つの品も四
つのまことも

法師の、是の如き德を成就せるを、應に天華を以つて散じ、天衣を其の身に覆ひ、頭面に足を接して禮し、心を生じて佛の想の如くにすべし、又應に是の念を作すべし、久しからずして、道場に詣して無漏無爲を得、廣く諸の天人を利せんと、其の所住止の處、經行し若は坐臥し、乃至一偈をも說かん、是の中には應に塔を起てて、莊嚴し妙好ならしめて、種種に以つて供養すべし、佛子此の地に住すれば、則ち是佛受用したまふ、常に其の中に住して、經行し若は坐臥したまはん。

第十八　隨喜功德品（通論其二―五十展轉）

解題　迹門分の通論、法師品に於て五種法師といふことを說いて、末代弘通の方法を示した、今本門分に於ても已に上の分別功德品にて、四信五品の功德を校量した、便宜上三者を配當して見ると左の如し。

五　品　　四　信　　五種法師
一、隨喜品――一念信解――受　持
二、讀誦品――略解言趣――讀、誦
三、說法品……（略爲他說）……解　說
四、兼行六度――廣爲他說――書　寫
五、正行六度――深信觀成

之の中、四信五品の相互關係は前述の如しとして、五種法師を配したるに就て一言を附加せんに、受持讀誦解說の三行が夫々前者と一致して居ることは申す迄もない（法師品の解題參照）事だが、終の書寫行が即ち廣爲他說及び深信觀成に相當するやといふに、決して左樣であるといふ譯ではない、而し乍ら書寫の位置は四信五品の極位に比敵するものであらう、何んとなれば、書寫は單なる書寫の樣に見ゆるけれども、其の第五の位置は單なる書寫の一行を以て目すべきでない、彼の四信五品が初の一を基本として次第に積み重ねて行く樣に、受持といふ單位に讀誦行が加はりて第二第三の位置が出來、それに解說行が累なりて第四の位置が出來、其の上に書寫行が重なつて第五の位置が出來たのである、即ち書寫の名目が代表する內容は（受持＋讀＋誦＋解說＋書寫）＝第五書寫の最上位を示すものである、而して受持、讀、誦、解說の四行が四信の中第一第二、五品の中第一第二第三に相當するを以て、書寫の位置が自然四信五品の極位に配せらるるに至るのである、而し乍ら以上名目の配當より一歩を進めて內容を以て論ずるの日には、四品五品は皆受持讀誦等の五種法師の修行を廣く行じたといふ丈であつて決して其の範圍を脫して別箇のものを建てたのではないといふことが出來る、深く經文を味うたならば其間の

消息は自ら知ることが出來るであらう。

偖分別功德品に於て法華信仰の功德を、四信五品の階梯を假りて説明されたが、これよりは更に一歩を進めて、詳細なる説明を加へんとするのである、それで第一に隨喜の功德（四信ノ一念信解―五種法師ノ受持ノ修行）を。

述べるから當品を隨喜功德品と名けるのである。

大筋　彌勒菩薩が滅後に於て法華經を隨喜するものゝ功德は幾何なりやと御伺ひ申上げると、佛は五十展轉隨喜の功德といふことを御説きになる、或る人が法會で法華經を聞て、難有と感じ隨喜した所を、父母親友に語る、其れを又父母等が自分の喜び丈を他人に傳へる、かく展轉すること第五十人に至る、其の五十人目の隨喜の念は餘程薄いものであるが、其の薄らげる功德を世界のあらゆる生きとし生けるものに對し、夫々其の欲するが儘に如何なるものをも施すこと滿八十年、其上佛道を敎へて阿羅漢の證を得さしめた廣大の功德に比するに、此の滿八十年の布施行は第五十人の隨喜の功德の百千（一）億分の一にも及ばないのである、若し進んで人を奬めて法座に到らしめたものは五十通りの善き果報を受くる、所謂陀羅尼菩薩と一處に生れ、智惠あり利根にして、瘖瘂ならず、口の氣臭からず乃至生々世世に佛を見、法を聞くことを得る、と、而し乍ら、法華隨喜の一行は根本的修行で

あつて、布施等の修行は枝末の細行であるから、かくの如き勝劣を見る次第である、故に日蓮上人は廣略を捨て、肝要を好むと云はれたのである。（分別功德大意品六度以下參照）

日蓮上人（唱法華題目抄）曰隨喜ト申スハ隨順ノ義也サセル義理ヲ知ラズトモ一念モ貴キ由申スハ違背隨順ノ中ニハ何レニカ取ラレ候ベキ　最惠法親王法の花いく山風にさそはれてこゝまでもなほ匂ひ來ぬらむ

妙法蓮華經隨喜功德品第十八

爾の時に彌勒菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、世尊、若善男子、善女人有りて、是の法華經を聞きたてまつりて隨喜せん者は、幾所の福をか得ん。而も偈を說きて言さく、

世尊滅度の後に、其是の經を聞くこと有りて、若能く隨喜せん者は、幾所の福をか得爲き。

爾の時に佛、彌勒菩薩摩訶薩に告げたまはく、

阿逸多、如來の滅後に、若比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷及び餘の智者、若は長、若は幼、是の經を聞きて、

日蓮上人（月水抄）曰法華經ハ一日ノ所作ニ一部八卷二十八品或ハ一卷或ハ一品一偈一句一字或ハ題目バカリヲ南無妙法蓮華經ト只一遍唱ヘ或ハ又一期ノ間ニ只一度唱ヘ或ハ又一期ノ間ニ遍唱フ隨喜ルタヾ一イテ聞ルヲ隨喜スルヲ聲或ハ聞イテ體ヲ隨喜シテ是ニ五十展轉シテ末ニナリテ

隨喜し已りて、法會より出でて餘處に至らん。若は僧房に在り、若は空閑の地、若は城邑、巷陌、聚落、田里にして、其の所聞の如く、父母、宗親、善友、知識の爲に、力に隨ひて演說せん。是の諸人等、聞き已りて隨喜して、復行きて轉敎せん。餘の人聞き已りて、亦隨喜して轉敎せん。是の如く展轉して、第五十に至らん。阿逸多、其の第五十の善男子、善女人の隨喜の功德を、我今之を說かん。汝當に善く聽くべし。若、四百萬億阿僧祇の世界の六趣、四生の衆生は、卵生、胎生、濕生、化生、若は有形、無形、有想、無想、非有想、非無想、無足、二足、四足、多足、是の如き等の衆生の數に在らん者に、人有りて福を求めて、其の所欲に隨ひて、娛樂の具、皆之に給與せん。一一の衆生に、閻浮提に滿てらん金、銀、瑠璃、硨磲、碼碯、珊瑚、琥珀、諸の妙なる珍寶、及び象馬、車乘、七寶所成の宮殿、樓閣等を與へん。是の大施主、是の如く布施すること、八十年を滿ちて、已りて是の念を作さく、

我已に衆生に、娛樂の具を施すこと意の所欲に隨ふ。然るに此の衆生、皆已に衰老して、年八十を過ぎて、髮白く、面皺みて、將に死せんこと久しからじ。我當に佛法を以つて、之を訓導すべし。

バ志モウスクナリ隨喜ノ心ノ弱キ事二三歲ノハカナキガノ者ノ幼稚ノ者如ク牛馬ナンドノ前後チ辨ヘザルガ如クナリトモ他經チ學ストモ人ノ利根ニシテ智カシコク舍利弗目連文殊慧利ノ人ノ諸經チ彌勒ノ如クナル人ノ胸ノ內ニウカベテ御坐シマサン人々ノ御功德ヨリモ勝レタル事百千万億倍ナルベ

キヨシ経文並ニ天台妙樂ノ六十卷ノ中ニ見エ侍リ云云

又（藥王品得意抄）曰此經ハ漸次深多ニシテ五十展轉也諸經ニハ猶一無シ況ヤ二三四乃至五十展轉ハ河深ケレドモ大海淺キニ及バス諸經ハ一字一句十念等ヲ以テ十惡五逆等ノ惡機ヲ攝スト雖一字一句ノ隨喜五十展轉ニハ及バザル也

四生　卵生（鳥魚ノ類）胎生（人獸ノ類）濕生（虫類）化生（四天王ノ忽然トシテ母ノ膝ノ上ニ化生スルガ如キ類）

有形、無形

欲界色界ノ人及ビ天人ハ形アリ無色界ニハ形ナシ

有想、無想

皆無色界天ニ屬ス空處天ト識處天ハ有想無處有處天ハ無想、非想天

即ち此の衆生を集めて、宣布法化し、示教利喜して、一時に皆須陀洹道、斯陀含道、阿那含道、阿羅漢道を得、諸の有漏を盡し、深禪定に於いて、皆自在を得、八解脫を具せしめん。汝が意に於いて云何。是の大施主の所得の功德、寧ろ爲多しや不や。

彌勒佛に白して言さく、世尊、是の人の功德甚だ多くして、無量無邊なり。若是の施主、但衆生に一切の樂具を施さんすら、功德無量ならん。何に況や阿羅漢果を得しめんをや。

佛彌勒に告げたまはく、我今分明に汝に語る。是の人、一切の樂具を以つて、四百萬億阿僧祇の世界の、六趣の衆生に施し、又、阿羅漢果を得しめん。所得の功德は、是の第五十の人の法華經の一偈を聞きて、隨喜せん功德には如かじ。百分、千分、百千萬億分にして、其の一にも及ばじ。乃至算數譬諭も知ること能はざる所なり。阿逸多、是の如く第五十の人の展轉して、法華經を聞きて隨喜せん功德、尚無量無邊阿僧祇なり。何に況や、最初に會中に於いて、聞きて隨喜せん者をや。其の福復勝れたること、無量無邊阿僧祇にして、比することを得べからず。

又阿逸多、若人、是の經の爲の故に、僧房に往詣して、

（具ニハ非想非非想天ト云ウテ想ニアラズ想ニ非ザルモノニモ非ズノ意）ハ非有想、非無想ニ屬ス

二足、四足、多足、二足ハ人間ノ類、四足ハ獸類、多足ハ百足ノ類

須陀洹道聞ノ四果ノ初聲メニシテ聖預流ト譯ス始メテ聖者ノ流レニ入ルノ意

斯陀含道第二果一來ト譯ス次ノ第三果ト對比スベシ

阿那含道第三果不還ト譯ス前者ハ一度天ニ生ン一度娑婆世界ニ生レ來ルニ反シテ此ノ位ハ最早再ビ娑婆世界ニ還ラズ

阿羅漢第四果聲聞ノ極地無生ト譯ス全ク煩惱ヲ斷盡セル聖者ナリ

是の人の功德は、身を轉じて陀羅尼菩薩と共に、一處に生ずることを得ん。利根にして智慧あらん。百千萬世に、終に瘖瘂ならず。口の氣臭からず、舌に常に病無く、口に亦病無けん。齒垢つき黑からず、黃ならず、疎ならず、亦缺落せず、差はず、曲らず、脣下垂せず、亦褰縮せず、麤澁ならず、瘡胗ならず、亦缺壞せず、喎邪ならず、厚からず、大いならず、亦黧み黑まず、諸の惡むべきこと無けん。鼻匾匸ならず、亦曲戾ならず、面色黑からず、亦狹く長からず、亦窊み曲らず、一切の喜ふべからざる相有ること無けん。脣舌牙齒、悉く皆嚴好ならん。鼻脩く、高直にして、面貌圓滿し、眉

若は坐し、若は立ちて、須臾も聽受せん。是の功德に緣りて、身を轉じて生る所には、好き上妙の象馬、車乘、珍寶の輦輿を得、及び天宮に乘ぜん。若復人有りて講法の處に於いて坐せん。更人の來ること有らんに、勸めて坐して聽かしめ、若は座を分ちて坐せしめん。是の人の功德は、身を轉じて帝釋の坐處、若は梵天王の坐處、若は轉輪聖王の所坐の處を得ん。阿逸多、若復人有りて、餘人に語りて言はまく、經有り。法華と名けたてまつる。共に往いて聽くべしと。

即ち其の敎を受けて、乃至須臾の間も聞かん。是の人

尼ハ總持ト譯ス所有ル功德ヲ總テ攝持セル菩薩ノ意ヲシテ

瘖瘂ロ裏蠱癡アガルヒビアレル

喝邪クロシガム

聾盲ウスク

匾躄ヒラタシク

曲戾ガレル鼻ノマ

高くして長く、額廣く、平正にして、人相具足せん。世世に生れん所には、佛を見、法を聞き、教誨を信受せん。阿逸多、汝且く是を觀ぜよ。一人を勸めて、往いて法を聽かしむる。功德此の如し。何に況や、一心に說を聽きて讀誦し、而も大衆に於いて、人の爲に分別し、說の如く修行せんをや。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

若人法會に於いて、是の經典を聞くことを得て、乃至一偈に於いても、隨喜して佗の爲に說かん、是の如く展轉して敎ふること第五十に至らん、最後の人の福を獲んこと今當に之を分別すべし、如大施主有りて、無量の衆に供給すること、具さに八十歲を滿てて、意の所欲に隨はん、彼の衰老の相の、髮白くして面皺み、齒疎にして形枯竭せるを見て、其死せんこと久しからじ、我今應當に敎へて、道果を得しむべしと念じて、卽ち爲に方便して、涅槃眞實の法を說かん、世は皆牢固ならざること水末泡焰の如し、汝等咸く應當に、疾く厭離の心を生ずべし、諸人是の法を聞きて、皆阿羅漢を得、六神通、三明八解脫を具足せん、最後第五十の一偈を聞き隨喜せん、是の人の福彼に勝れたること、譬諭するこことを爲べからず、是の如く展轉して聞く、其の福尙

優鉢華　優曇華トモ云ヒ具ニハ優曇鉢羅

無量なり、何に況や法會に於いて、初めて聞きて隨喜せん者をや、若一人を勸めて、將引して法華を聽かしむること有りて言はまく、此の經は深妙なり、千萬劫に遇ひ難しと、即ち教を受けて往いて聽くこと、乃至須臾も聞かん、斯の人の福報、今當に分別して說くべし、世世に口の患無く、齒疎き黃み黑まず、脣厚く褰り缺けず、惡むべき相有ること無けん、舌乾き黑み短からず、鼻高く脩く且直からん、額廣くして平正に、面目悉く端嚴にして、人に見えんと喜はるることを爲ん、口の氣臭穢無くして、優鉢華の香、常に其の口より出でん、若故らに僧房に詣りて、法華經を聽かん

華、義ヨリ譯シテ靈瑞華ト云フ三千年ニ一度花ヲ開クト云フ

釋梵轉輪の座　釋提桓因天王（帝釋天ノコト）大梵天王、轉輪聖王等ノ位置ヲ占ムベキ果報

と欲して、須臾も聞きて歡喜せん、今當に其の福を說くべし、後に天人の中に生れて、妙なる象馬車、珍寶の輦輿を得、及び天の宮殿に乘ぜん、若講法の處に於いて、人を勸めて坐して經を聽かしめん、是の福の因緣をもつて、釋梵轉輪の座を得ん、何に況や一心に聽き、其の義趣を解說し、說の如く修行せんをや、其の福限るべからず。

水上をおもひこそやれ谷川の
流れもにほふ菊の下みづ

法眼源承

第十九　法師功德品（通論其三——六根清淨）

解題　隨喜功德品の解題に於て述べた如く、法華受持の功德の詳說が先づ隨喜功德品に始まり、當品に至つたのである、それで前段に於ては第一の隨喜——一念信解——受持の功德が述べられたから、今や後の二三四等に及ばねばならぬ。

偖前段は隨喜の功德とあるが、當品では五種法師の名の下に、其の功德を御說き遊ばしてあるから、法師功德品といふのである（迹門分法師品の解題參照）

大筋　佛が常精進菩薩に告げ給ふには、此の法華經を

受持し讀誦し解說し書寫するものは、眼、耳、鼻、舌、身、意の六根が清淨になる、即ち父母所生の肉眼を以て、三千大千世界の內外あらゆる山林河海、下は無間地獄より上は悲想天迄、一目の內に收むることが出來る（眼根清淨）又世界中に在る所の所有聲を聞き分けることや（耳根清淨）諸種の香をかぎ、地中の寶物の所在を知り、懷妊者の安產不安產、又は他人が如何なる心を以て居るかといふ樣なことを知り得るのである、若し美味と不美味とを論ぜず、其の舌の上に置く時は皆極上のものと變ずることが出來る、其の人の演說は皆喜んで聞き快樂を得せしむるであらう（舌根清淨）或は清淨の身を得て、一切の人々に見んことを願はれる（身根清淨）一偈一句を聞く時は直に無量無邊の義に通達し、如何なる俗間の書籍を講ずとも、皆眞理と一致して決して違背する樣なことはない（意根清淨）終に臨んで根の義を一寸と說明して置く、根とは草木の根が外界――土から養分を吸收し、自體――幹莖を能く保持するが如く、眼や耳や舌などが、外界の現象を感受し、內界の精神作用を發す、即ち客觀の色、聲、香、味、觸、法の六境より種々の事柄を受取り、主觀の眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識を發生する仲介機關であるから、根の名を附してあるのである、猶根と識との區別に就ては充分說明する餘地のないのを殘念に思ふので

ある。

日蓮上人（當體義抄）曰所詮妙法蓮華ノ當體トハ法華經ヲ信ズル日蓮ガ弟子檀那等ノ父母所生ノ肉身是也

父母所生の清淨肉眼以下ハ六根清淨ノ第

妙法蓮華經法師功德品第十九

爾の時に佛、常精進菩薩摩訶薩に告げたまはく、

若善男子、善女人、是の法華經を受持し、若は讀み、若は誦し、若は解說し、若は書寫せん。是の人は、當に八百の眼の功德、千二百の耳の功德、八百の鼻の功德、千二百の舌の功德、八百の身の功德、千二百の意の功德を得べし。是の功德を以つて、六根を莊嚴して、皆清淨ならしめん。

是の善男子、善女人は、父母所生の清淨肉眼をもつて、三千大千世界の、內外の有らゆる山林、河海を見

一眼根清淨ヲ説ク　阿鼻地獄　最下ノ所、無間地獄ト譯ス　衆生ノ苦シミ間隙ナキ所ナレバナリ　有頂　欲界色界無色界ヲ三界二十五有ト云フ　其ノ有ノ絶頂ノ天ト云フ　意味非想非非想天ノ事ナリ　彌樓山　地持山ト譯ス　須彌山ト譯ス　須彌山ノ一也　妙高山ト譯ス　一世界ノ中央ニ聳立シ海拔八萬四千由旬ト稱ス　東面ハ黃金　西面ハ白銀　南面ハ頗梨　北面ハ瑪瑙ヨリナル　日月此ノ中腹ヲ同ル　ト云フ　千二百の耳　以下ハ第二耳根清淨ヲ説ク

ること、下阿鼻地獄に至り、上有頂に至らん。亦其の中の一切衆生を見、及び業の因緣、果報の生處を悉く見、悉く知らん。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

若大衆の中に於いて、無所畏の心を以つて、是の法華經を説かん、汝其の功德を聽け、是の人は八百の功德殊勝の眼を得ん、是を以つて莊嚴するが故に、其の目甚だ淸淨ならん、父母所生の眼をもつて、悉く三千界の內外の彌樓山、須彌及び鐵圍幷びに諸餘の山林、大海江河水を見ること、下阿鼻獄に至り上有頂天に至らん、其の中の諸の衆生、一切皆悉く見ん、未だ天眼を得ずと雖も、肉眼の力是の如くならん。

復次に常精進、若善男子、善女人、此の經を受持し、若は讀み、若は誦し、若は解説し、若は書寫せんに、千二百の耳の功德を得ん。是の淸淨の耳を以つて、三千大千世界の下阿鼻地獄に至り、上有頂に至る。其の中の內外の種種の所有の語言、音聲、象聲、馬聲、牛聲、車聲、啼哭聲、愁歎聲、贏聲、鼓聲、鐘聲、鈴聲、笑聲、語聲、男聲、女聲、童子聲、童女聲、法聲、非法聲、苦聲、樂聲、凡夫聲、聖人聲、喜聲、不喜聲、天聲、龍聲、夜叉聲、乾闥婆聲、阿脩羅聲、迦樓羅聲、

緊那羅聲、摩睺羅伽聲、火聲、水聲、風聲、地獄聲、畜生聲、餓鬼聲、比丘聲、比丘尼聲、聲聞聲、辟支佛聲、菩薩聲、佛聲を聞かん。要を以つて之を言はば、三千大千世界の中の、一切の内外の有らゆる諸の聲、未だ天耳を得ずと雖も、父母所生の清淨の常耳を以つて、皆悉く聞知せん。是の如く種種の音聲を分別すとも、而も耳根を壞らじ。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

父母所生の耳、清淨にして濁穢無く、此の常耳を以つて、三千世界の聲を聞かん、象馬車牛の聲、鐘鈴贏鼓

迦陵頻聲　妙聲、好聲等ト譯ス聲諸鳥ニ勝グレ佛ノ音聲ヲ除イテ能ク及ブモノナシト

命命鳥ノ名　梵語ニ耆婆耆婆鳥ト云フ一身二頭ナリ故ニ共命、生々トモ譯ス雪山ニ住メリト

の聲、琴瑟箜篌の聲、簫笛の音聲、清淨好歌の聲、之を聽きて著せず、無數種の人の聲、聞きて悉く能く解了せん、又諸天の聲、微妙の歌の音を聞き、及び男女の聲、童子童女の聲を聞かん、山川險谷の中の、迦陵頻伽の聲、命命等の諸鳥、悉く其の音聲を聞かん、地獄の衆の苦痛、種種の楚毒の聲、餓鬼の飢渴に逼められて、飲食を求索する聲、諸の阿脩羅等の、大海の邊に居在して、自ら共に言語する時、大音聲を出すをも、是の如き說法者は、此の閒に安住して、遙かに是の衆の聲を聞き、耳根を壞らじ、十方世界の中の、禽獸の鳴きて相呼ぶ、其の說法の人、此に於いて悉く之を聞

かん、其の諸の梵天上、光音及び徧淨、乃至有頂天の、言語の音聲、法師此に住して、悉く皆之を聞くことを得ん、一切の比丘衆、及び諸の比丘尼の、若は經典を讀誦し、若は佗人の爲に說かん、法師此に住して、悉く皆之を聞くことを得ん、復諸の菩薩有りて、經法を讀誦し、若は佗人の爲に說きて、撰集して其の義を解せん、是の如き諸の音聲、悉く皆之を聞くことを得ん、諸佛大聖尊の、衆生を敎化したまふ者、諸の大會の中に於いて、微妙の法を演說したまふ、此の法華を持たん者は、悉く皆之を聞くことを得ん、三千大千界の內外の諸の音聲、下阿鼻獄に至り、上有頂天に至るまで、皆其の音聲を聞きて、耳根を壞らじ、其の耳聰利なるが故に、悉く能く分別して知らん、是の法華を持たん者は、未だ天耳を得ずと雖も、但所生の耳を用ふるに、功德已に是の如くならん。

八百鼻以下ハ第三鼻根淸淨ヲ說ク

復次に常精進、若善男子、善女人、是の經を受持し若は讀み、若は誦し、若は解說し、若は書寫せんに、八百の鼻の功德を成就せん。是の淸淨の鼻根を以つて三千大千世界の、上下、內外の種種の諸の香を聞がん。須曼那華香、闍提華香、末利華香、瞻蔔華香、波羅羅華香、赤蓮華香、青蓮華香、白蓮華香、華樹香、果樹香、栴檀香、沈水香、多摩羅跋香、多伽羅香、及び千

波利質多羅樹王ト譯ス
天樹ノ喜見一切
忉利天ノ城ニアリ
樹木ノ王ナリ
ト云フ

萬種の和香、若は抹、若は丸、若は塗香、是の經を持たん者は、此閒に於いて、住して悉く能く分別せん。又復衆生の香、象の香、馬の香、牛羊等の香、男の香、女の香、童子の香、童女の香、及び草木叢林の香を別へ知らん。若は近き、若は遠き、有らゆる諸の香、悉く皆聞ぐことを得て、分別して錯らじ。是の經を持たん者は、此に住せりと雖も、亦天上の諸天の香を聞がん。波利質多羅、拘鞞陀羅樹香、及び曼陀羅華香、摩訶曼陀羅華香、曼殊沙華香、摩訶曼殊沙華香、栴檀沈水、種種の抹香、諸の雜華香、是の如き等の天香、和合して出す所の香、聞ぎ知らざること無

妙法堂善法堂トモ云フ忉利天ノ西南角ニアリ三十三天此ニ集マリ如法、不如法ノ事ヲ論ズト云フ

けん。又諸天の身の香を聞がん。釋提桓因の勝殿の上に在りて、五欲に娛樂して嬉戲する時の香、若は妙法堂の上に在りて、忉利の諸天の爲に說法する時の香、若は諸の園に於て、遊戲する時の香、及び餘の天等の男女の身の香、皆悉く遙かに聞がん。是の如く展轉して、乃ち梵天に至り、上、有頂に至る諸天の身の香、亦皆之を聞ぎ、幷びに諸天の燒く所の香を聞がん。及び聲聞の香、辟支佛の香、菩薩の香、諸佛の身の香、亦皆遙かに聞ぎて、其の所在を知らん。此の香を聞ぐと雖も、然も鼻根に於いて、壞らず錯ら

じ。若分別して、佗人の爲に說かんと欲せば、憶念して謬らじ。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

是の人は鼻淸淨にして、此の世界の中に於いて、若は香しく若は臭き物、種種悉く聞ぎ知らん、須曼那闍提、多摩羅梅檀、沈水及び桂香、種種の華果の香、及び衆生の香、男子女人の香を知らん、說法者は遠く住して、香を聞ぎて所在を知らん、大勢の轉輪王、小轉輪及び子、羣臣諸の宮人、香を聞ぎて所在を知らん、身に著たる所の珍寶、及び地中の寶藏、轉輪王の寶女、香を聞ぎて所在を知らん、諸人の嚴身の具、衣服及び瓔珞、種種の塗れる所の香、聞ぎて則ち其の身を知らん、諸天の若は行坐、遊戲及び神變、是の法華を持たん者は、香を聞ぎて悉く能く知らん、諸樹の華果實、及び蘇油の香氣、持經者は此に住して、悉く其の所在を知らん、諸山の深く嶮しき處に、栴檀樹の華敷き、衆生の中に在る者を、香を聞ぎて皆能く知らん、鐵圍山大海、地中の諸の衆生、持經者は香を聞ぎて、悉く其の所在を知らん、阿脩羅の男女、及び其の諸の眷屬、鬪諍し遊戲する時、香を聞ぎて皆能く知らん、曠野險隘の處、師子象虎狼、野牛水牛等、香を聞ぎて

無根及び非人
男女ノ陰根ナキヲ無根ト云ヒ人ニ非ザル鬼畜ヲ非人ト云フ

所在を知らん、若懷妊せる者有りて、未だ其の男女無根及び非人を辨へず、香を聞ぎて悉く能く知らん、香を聞ぐ力を以つての故に、其の初めて懷妊し、成就し成就せざる、安樂にして福子を產まんことを知らん、香を聞ぐ力を以つての故に、男女の所念、染欲癡恚の心を知り、亦善を修する者を知らん、地中の衆の伏藏、金銀諸の珍寶、銅器の盛れる所、香を聞ぎて悉く能く知らん、種種の諸の瓔珞の、能く其の價を識ること無き、香を聞ぎて貴賤、出處及び所在を知らん、天上の諸の華等の、曼陀曼殊沙、波利質多樹、香を聞ぎて悉く能く知らん、天上の諸の宮殿、上中下の差別、

光音、徧淨天
色界ハ四禪ニ分チ十八天チ數フ彼ノ大梵天ハ初禪天ニシテ今ノ光音天ハ第二禪天、徧淨天ハ

衆の寶華の莊嚴せる、香を聞ぎて悉く能く知らん、天の園林勝殿諸觀妙法堂、中に在りて娛樂する、香を聞ぎて悉く能く知らん、諸天の若は法を聽き、或は五欲を受くる時、來往行坐臥する、香を聞ぎて悉く能く知らん、天女の著たる衣、好き華香をもつて莊嚴して、周旋し遊戲する時、香を聞ぎて悉く能く知らん、是の如く展轉し上りて、乃ち梵天に至る、入禪出禪の者、香を聞ぎて悉く能く知らん、光音徧淨天乃し有頂に至る、初生及び退沒、香を聞ぎて悉く能く知らん、諸の比丘衆等の、法に於いて常に精進し、若は坐し若は經行し、及び經法を讀誦し、或は林樹の下に在り

第三禪ニ位ス最頂ノ天ヲ色究竟天ト云フ第四禪ニアリ此ノ上ニ無色界アリ其ノ最上ナルヲ有頂天（非想天）ト云フ混ズル勿レ

て、専精にして坐禪する、持經者は香を聞ぎて悉く其の所在を知らん、菩薩の志堅固にして、坐禪し若は讀經し、或は人の爲に說法する、香を聞ぎて悉く能く知らん、在在方の世尊の、一切に恭敬せられて、衆を愍みて說法したまふ、香を聞ぎて悉く能く知らん、衆生の佛前に在りて、經を聞きて皆歡喜し、法の如く修行する、香を聞ぎて悉く能く知らん、未だ菩薩の無漏法生の鼻を得ずと雖も、而も是の持經者は先此の鼻の相を得ん。

無漏法生　煩惱ノ全ク漏レ出ヅルコト盡キタル悟ノ上ニ生ズルノ意

復次に常精進、若善男子、善女人、是の經を受持し、若は讀み、若は誦し、若は解說し、若は書寫せんに、

千二百の舌、以下ハ第四舌根清淨ヲ說ク

千二百の舌の功德を得て、若は好、若は醜、若は美、若は不美、及び諸の苦澁の物、其の舌根に在かば、皆變じて上味と成りて、天の甘露の如くにして、美からざる者無けん。

若舌根を以つて、大衆の中に於いて演說する所有らば、深妙の聲を出して、能く其の心に入れて、皆歡喜し快樂せしめん。

又諸の天子、天女、釋梵諸天、是の深妙の音聲の、演說する所有る言論の次第を聞きて、皆悉く來りて聽かん。及び諸の龍、龍女、夜叉、夜叉女、乾闥婆、乾闥婆女、阿脩羅、阿脩羅女、迦樓羅、迦樓羅女、緊

七寶千子輪聖王ノ感得セル寶女、千ノ王子ヲ生ムト云フ

那羅、緊那羅女、摩睺羅伽、摩睺羅伽女、法を聽かんが爲の故に、皆來りて親近し、恭敬し供養せん。及び比丘、比丘尼、優羅塞、優婆夷、國王、王子、羣臣、眷屬、小轉輪王、大轉輪王、七寶千子、內外の眷屬、其の宮殿に乘じて、俱に來りて法を聽かん。是の菩薩、善く說法するを以つての故に、婆羅門、居士、國內の人民、其の形壽を盡すまで、隨侍し供養せん。又諸の聲聞、辟支佛、菩薩、諸佛、常に樂ひて之を見たまはん。是の人の所在の方面には、諸佛皆、其の處に向ひて法を說きたまはん。悉く能く一切の佛法を受持し、又能く深妙の法音を出さん。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

是の人は舌根淨くして終に惡味を受けじ、其の食噉する所有るは悉く皆甘露と成らん、深淨の妙聲を以つて、大衆に於いて法を說かん、諸の因緣諭を以つて衆生の心を引導せん、聞く者皆歡喜して、諸の上供養を設けん、諸の天龍夜叉、及び阿脩羅等、皆恭敬の心を以つて、共に來りて法を聽かん、是の說法の人、若妙音を以つて、三千界に徧滿せんと欲せば、意に隨ひて卽ち能く至らん、大小の轉輪王及び千子眷屬、合掌し恭恭の心をもつて、常に來りて法を聽受せん、諸の天龍夜

羅刹、毗舍闍前者ハ食人鬼ト譯シ惡鬼ノ通名ナリ、後者ハ啖精鬼ト譯シ人ノ精氣ヲ喰フト云フ

魔王、自在、大自在欲天ノ頂上ニ居スチ以テ第六天ノ魔王ト云フ他化自在天ノ事也、第五天ヲチ云フ化樂天ト云フ二者對稱シテ自在、大自在ノ稱起ル、化樂ハ自身ノミ變化シテ樂ムニ反シ他化天ハ他ノ劣等ノ天ヲチ變化セシム故ニ大ノ名ヲチ得ハ八百身以下ハ第五身根清淨ヲ說ク

唯獨目明了余人所不見

又、羅刹毗舍闍、亦歡喜の心を以つて、常に樂ひて來り供養せん、梵天王魔王、自在大自在、是の如き諸の天衆、常に其の所に來至せん、諸佛及び弟子、其の說法の音を聞きて、常に念じて守護し、或時は爲に身を現じたまはん。

復次に常精進、若善男子、善女人、是の經を受持し、若は讀み、若は誦し、若は解說し、若は書寫せん。八百の身の功德を得て、清淨の身の、淨瑠璃の如くにして、衆生の見んと喜ふを得ん。其の身淨きが故に、三千大千世界の衆生の生ずる時、死する時、上下、好醜、善處、惡處に生ずる、悉く中に於いて現ぜん。及び鐵圍山、大鐵圍山、彌樓山、摩訶彌樓山等の諸山王及び其の中の衆生、悉く中に於て現ぜん。下阿鼻地獄に至り、上有頂に至る所有、及び衆生、悉く中に於て現ぜん。若は聲聞、辟支佛、菩薩、諸佛の說法、皆身中に於いて、其の色像を現ぜん。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

若法華經を持たば、其の身甚だ淸淨なること彼の淨瑠璃の如くにして、衆生皆見んと喜はん、又淨明なる鏡に、悉く諸の色像を見るが如く、菩薩淨身に於いて、皆世の所有を見ん、唯獨自ら明了にして、餘人

大僧正日扇
あたらしとお
もふはかりそ
人しらぬ
谷の流れにす
める月影

千二百の意
以下ハ第六意
根清淨ヲ說ク

の見ざる所ならん、三千世界の中の、一切の諸の羣萌、天人阿脩羅、地獄鬼畜生、是の如き諸の色像、皆身中に於いて現ぜん、諸天等の宮殿、乃ち有頂に至る、鐵圍及び彌樓、摩訶彌樓山、諸の大海水等、皆身中に於いて現ぜん、諸佛及び聲聞、佛子菩薩等、若は獨若は衆に在りて、說法する悉く皆現ぜん、未だ無漏法性の妙身を得ずと雖も、清淨の常體を以つて一切中に於いて現ぜん。

復次に常精進、若善男子、善女人、如來の滅後に、是の經を受持し、若は讀み、若は誦し、若は解說し、若は書寫せんに、千二百の意の功德を得ん。是の清淨

日蓮上人（災難對治抄）曰
金光明經云一切世間ノ所有ノ善論ハ皆此ノ經ニ因ル法華經云若シ俗間ノ經書治世ノ語言資生ノ業等說ンモ皆正法ニ順ズ普賢經ニ云ク正法ヲ以テ國ヲ治メ人民ヲ邪枉セズ是ヲ第三ノ懺悔ヲ修ス名ク涅槃經ニ云ク一切世間ノ外道經書ハ皆是佛說ニシテ外道ノ說

の意根を以つて、乃至一偈、一句を聞くに、無量無邊の義を通達せん。是の義を解り已りて、能く一句、一偈を演說することと、一月、四月、乃至一歲に至らん。

諸の所說の法、其の義趣に隨ひて、皆實相と相違背せじ、若俗間の經書、治世の語言、資生の業等を說かんに、皆正法に順ぜん。三千大千世界の六趣の衆生、心の行ずる所、心の動作する所、心の戲論する所、皆悉く之を知らん。未だ無漏の智慧を得ずと雖も、而も其の意根の清淨なること、此の如くならん。是の人の思惟し、籌量し、言說する所有らんは、皆是佛法にして、眞實ならざること無く、亦是、先佛の經の中の所說ならん。

ニ非ズ止觀（天台大師）云ク若シ深ク世法ヲ識レバ即是レ佛法ナリ

月四月　一月二月三月四月乃至一年ニ及ブノ長講ヲ云フ

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

是の人は意清淨に、明利にして穢濁無く、此の妙意根を以つて、上中下の法を知り、乃至一偈を聞くに、無量の義を通達せん、次第に法の如く說くこと、月四月より歲に至らん、是の世界の內外の、一切諸の衆生、若は天龍及び人、夜叉鬼神等、其の六趣の中に在る所念の若干の種、法華を持たん報は、一時に皆悉く知らん、十方無數の佛、百福莊嚴の相ありて、衆生の爲に說法したまふ、悉く聞きて能く受持せん、無量の義を思惟し、說法すること亦無量にして、終始忘れ錯らじ、法華を持つを以つての故に、悉く諸法の相を知り、義に隨ひて次第を識り、名字語言を達して、知れる所の如く演說せん、此の人の所說有るは、皆是先佛の法ならん、此の法を演ぶるを以つての故に、衆に於いて畏るる所無けん、法華經を持つ者は、意根淨きこと斯の若くならん、未だ無漏を得ずと雖も、先是の如き相有らん、是の人此の經を持ちて、希有の地に安住して、一切衆生歡喜して愛敬することを爲ん、能く、千萬種の善巧の語言を以つて、分別して演說せん、法華經を持つが故なり。

第二十　常不輕菩薩品（通論其四―逆化折伏）

解題　前段に法華受持の功德を詳說し、六根清淨の果報を得べきことを述べ終つたから、茲に其の先證を擧げ、其の眞實なるを信ぜしめん爲に、釋迦佛の過去談が起る。總て宗敎の事は哲學と異り、推理して矛盾なき丈で滿足するものでない、畢竟實際上に具體化するを以て目的とするものであるから事實といふ事に尤も重きを置くのである、日蓮上人が、『イカニ人申ストモ即身成佛ノ人ナクバ用ユベカラズ乃至大日經金剛頂經等ノ眞言經ニハ其人ナシ』といはれたのがそれである、如何に巧妙なる

議論でも人に勸める以上は、先づ其の先證を示して後其經の力用を信ぜしむるのが本當である、如何に此の飛行機は確であるというても、其の說明丈では保證とはならぬ、少くとも人は信じない、目前に飛んで見せるか、但しは過去に於て安全に飛行したレコードを示さねばならぬ、今の不輕品は其のレコードである、即ち迹門分の勸持品二十行の偈にあつた法難の事實談、釋尊の經歷談で又法師功德品の六根淸淨の實果等を示したものである。

大筋　佛、得大勢菩薩に告げ給ふには、法華經を說くものを謗る罪は法師品（迹門分）に、信奉するもの、六根淸淨なるは法師功德品に說けるが如きである、偖過去に於て六根淸淨となりし事實、及び行者を謗りて罪を得たる物語をしよう。往古威音王佛が二萬億遍、御出世ましましたが、其の最初の佛の御入滅の後、一の菩薩があつた、名を常不輕といふ、何故かといふに、其の人は在家でも出家でも、見る人逢ふ人毎に汝等は佛性を具へたるものなれば、やがて佛となることが出來る、此の故に汝等を輕んじない、というて合掌して拜む、拜まれた人は却つて腹を立てゝ、是の無智の比丘、何處より來るぞ、汝等の言を信用するものは一人もない、人を馬鹿にしやがると、いふ調子で瓦や石を投げ付けたり、棒で打擲したり

した、さうすると遠く避けて猶高聲に、我レ敢テ汝等ヲ輕シメズ汝等皆當ニ作佛スベシと唱ふる、そこで常不輕の名が何日の間にか人々の間に附けられたのてある、此の布教の仕方が逆化折伏といふので逆ふものを折り伏すといふ、極く手荒い遣方である、偖此の比丘が最後に臨終せんとするとき、先佛の說き給ひし法華經二十千萬億偈を具に聞いて、能く持ち上の六根淸淨を得た、それが爲に、更に壽命を增し二百萬億那由佗歲廣く人の爲に法華經を說いた、所で先に謗つた連中も此の時に及んでは皆信伏隨從した、不輕菩薩其後種々修行を積まれて遂に成佛することを得たが、一旦謗つた連中は二百億劫の間佛に値はず法を聞かず、千劫の長き間無間大城にあつた、而し其の罪滅びる時復不輕菩薩に敎化せられて成佛することを得たのである、其の不輕とは誰ぞ即ち我れ釋迦牟尼である、其時の謗りしものは誰ぞ、即ち此の大會中の跋陀婆羅等である。

已上、此の品の大要であるが、文中、杖木瓦石云云とあるのが其儘、日蓮上人の身の上に蒙つた大難であつた、それ故に日蓮上人は不輕ノ跡ヲ紹繼スとか、日蓮は未來世に於て不輕菩薩といはるゝ樣になるであらうとか、常にいはれて居つたのである。

日蓮上人（唱法華題目抄）

曰　此經ヲ信ゼザル謗法ノ罪業ハ譬喩品ニ悉クト説カレタリ持經者ヲ謗ズル罪ハ法師品ニトカレタリ此經ヲ信ズル者ノ功德ハ分別功德品隨喜功德品ニ説ケリ向に説く所法師功德品ノ六根清淨ヲモ加フベシ

妙法蓮華經常不輕菩薩品第二十

爾の時に佛、得大勢菩薩摩訶薩に告げたまはく、汝今當に知るべし。若比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の法華經を持たん者を、若惡口、罵詈、誹謗することあらば、大いなる罪報を獲んこと、前に説く所の如し。其の所得の功德は、向に説く所の如く、眼、耳、鼻、舌、身、意清淨ならん。

得大勢、乃往古昔に、無量無邊不可思議阿僧祇劫を過ぎて佛有しき。威音王如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊

と名けたてまつる。劫をば離衰と名け、國をば大成と名く。其の威音王佛、彼の世の中に於いて、天人阿脩羅の爲に法を說きたまふ。聲聞を求むる者の爲には、應ぜる四諦の法を說きて、生老病死を度し、涅槃を究竟せしめ、辟支佛を求むる者の爲には、應ぜる十二因緣の法を說き、諸の菩薩の爲には、阿耨多羅三藐三菩提に因せて、應ぜる六波羅蜜の法を說きて、佛慧を究竟せしむ。得大勢、是の威音王佛の壽は、四十萬億那由他恆河沙劫なり。正法世に住せる劫數は、一閻浮提の微塵の如く、像法世に住せる劫數は、四天下の微塵の如し。其の佛、衆生を饒益し已りて、然して後に滅度したまひき。正法、像法、滅盡の後、此の國土に於いて、復佛出でたまふこと有りき。亦威音王如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號けたてまつる。是の如く次第に二萬億の佛有す。皆同じく一號なり。最初の威音王如來、既已に滅度したまひて、正法滅して後、像法の中に於いて、增上慢の比丘、大勢力有り。爾の時に一りの菩薩の比丘有り、常不輕と名く。得大勢、何の因緣を以つてか常不輕と名くる。是の比丘、凡そ見る所有る、若は比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を皆悉く禮拜讚歎して、是の言を作さく、

日蓮上人（顯日）佛未來記）日此人ハ守護ノ力ヲ得テ本門ノ本尊妙法蓮華經ノ五字ニヲ以テ閻浮提ニ廣宣流布セシメン歟例セバ威音王佛ノ像法ノ時不輕菩薩ノ二十四字ニヲ以テ彼ノ土ニ廣宣流布シ一國ノ杖木等ノ大難ヲ招キシガ如ク彼ノ二十四字ト此ノ五字トハ其語殊ナリト雖其意

我深く汝等を敬ふ。敢へて輕慢せず。所以は何ん。汝等皆菩薩の道を行じて、當に作佛することを得べし。而も是の比丘、專らに經典を讀誦せずして、但禮拜を行ず。乃至遠く四衆を見ても、亦復故らに往きて禮拜讚歎して、是の言を作さく、我敢へて汝等を輕しめず。汝等皆、當に作佛すべきが故にと。

四衆の中に、瞋恚を生じ、心不淨なる者有りて、惡口罵詈して言はく、是の無智の比丘、何れの所より來りてか、自ら「我汝を輕しめず」と言ひて、我等が與に「當に作佛することを得べし」と授記す。我等、是の如き虛妄の授記を用ひずと。

此の如く多年を經歷して、常に罵詈せらるれども、瞋恚を生ぜずして、常に是の言を作す、『汝當に作佛すべし。』

是の語を說く時、衆人、或は杖木、瓦石を以つて、之を打擲すれば、避け走りて遠く住して、猶高聲に唱へて言はく、『我敢へて汝等を輕しめず、汝等皆當に作佛すべしと。』

其、常に是の語を作すを以つての故に、增上慢の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、之を號して常不輕と爲く。

又（聖人知三世事）日日蓮ハ是レ法華經ノ行者ナリ不輕ノ跡ヲ紹繼ス又（上野殿御返事）日不輕菩薩ハ杖木瓦石ト見エタレバ杖ノ字ニアヒヌ刀ノ難（私曰勸持品ノ二十行ノ初メノ文ニ刀杖ヲ加フルト云ハキカズ云）天台傳敎等ハ刀杖不加（安樂行品ノ文）之レ同ジ

ト見エタレバ是又カケタリ日蓮ハ刀杖ノ二字トモニアヒヌ

日蓮上人（呵責謗法抄）日蓮ト不輕菩薩トハ位ノ上下ハアレドモ同業ナレバ彼ノ不輕菩薩成佛シ給ハバ日蓮ガ佛果疑フベキヤ彼ハ二百五十戒ノ上

是の比丘終りなんと欲する時に臨みて、虛空の中に於いて、具さに威音王佛の、先に說きたまふ所の法華經の二十千萬億の偈を聞きて悉く能く受持して、卽ち上の如き眼根清淨、耳、鼻、舌、身、意根清淨を得たり。是の六根清淨を得已りて、更に壽命を增すこと二百萬億那由佗歲、廣く人の爲に是の法華經を說きき。時に增上慢の四衆、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の、是の人を輕賤して、爲に不輕の名を作せし者の、其の大神通力、樂說辯力、大善寂力を得たるを見て、其の所說を聞きて、皆信伏隨從す。是の菩薩、復千萬億の衆を化して、阿耨多羅三藐三菩提に住せしむ。命終の

慢ノ比丘ニ罵ラレタリ日蓮ハ持戒第一ノ良觀ニ讒訴セラレタリ彼ハ歸依セシカドモ千劫阿鼻獄ニオツ此ハ未ダ渴仰セズ知ラズ無數劫チヤ經ンズラン不便也不便也又（佐渡御書）日蓮ハ過去ノ不輕ノ如ク當世ノ人々ハ彼輕毀ノ四衆ノ如シ人ハ替レドモ因ハ是一也父母チ殺セル人異ナ

後、二千億の佛に値ひたてまつることを得、皆日月燈明と號く。其の法の中に於いて、是の法華經を說く。是の因緣を以つて、復二千億の佛に値ひたてまつる。同じく雲自在燈王と號く。此の諸佛の法の中に於いて、受持讀誦して、諸の四衆の爲に此の經典を說くが故に、是の常眼清淨、耳、鼻、舌、身、意の諸根の清淨を得て、四衆の中に於いて法を說くに、心畏るる所無かりき。得大勢、是の常不輕菩薩摩訶薩は、是の如き若干の諸佛を供養し、恭敬、尊重、讚歎して、諸の善根を種ゑ。後に復、千萬億の佛に値ひたてまつり、亦諸佛の法の中に於いて、是の經典を說きて、功德成就し

レドモ同ジ無間地獄ニ墮ツイカナレバ不輕ノ因ヲ行ジテ日蓮一人釋迦佛トナラザルベキ又彼諸人ハ跋陀婆羅等ト云ハレザラン乃至譬諭品ノ如ク無數劫ヲヤ經ンズラン三千五百ノ塵點ヲヤオクラン、コレハサテオキヌ日蓮ヲ信ズルヤウナリシ者ドモガ日蓮ガカウナレバ疑ヲオコシテ法華經ヲ捨ツルノミナラズ却ツテ日蓮ヲ教訓シテ我賢シト思ハン僻人等ガ念佛者ヨリモ久シク阿鼻地獄ニアラン事不便トモ申ス計リナシ

て、當に作佛することを得たり。得大勢、意に於いて云何。爾の時の常不輕菩薩は、豈異人ならんや。則ち我が身是なり。若我宿世に於いて、此の經を受持し讀誦し、佗人の爲に說かざりせば、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はざらん。我先佛の所に於いて、此の經を受持し讀誦し、人の爲に說きしが故に、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得たり。得大勢、彼の時の四衆の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷は、瞋恚の意を以つて我を輕賤せしが故に、二百億劫に、常に佛に値はず、法を聞かず、僧を見ず。千劫阿鼻地獄に於いて、大苦惱を受く。是の罪を畢ふると已りて、復常不輕菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を敎化するに遇ひき。得大勢、汝が意に於いて云何。爾の時の四衆の、常に是の菩薩を輕しめし者は、豈異人ならんや。今此の會中の跋陀婆羅等の五百の菩薩、師子月等の五百の比丘、尼思佛等の五百の優婆塞の、皆、阿耨多羅三藐三菩提に於いて退轉せざる者是なり。得大勢、當に知るべし。是の法華經は、大いに諸の菩薩摩訶薩を饒益して、能く阿耨多羅三藐三菩提に至らしむ。是の故に諸の菩薩摩訶薩、如來の滅後に於いて、常に應に是の經を受持讀誦し、解說書寫すべし。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說

日蓮上人（開目抄）曰不輕品云其罪畢已等云云不輕菩薩ハ過去ニ法華經ヲ謗ジ給フ罪身ニアル故ニ瓦石ヲヤホルト見エタリ又（佐渡御書）

きて言はく、過去に佛有しき、威音王と號けたてまつる、神智無量にして、一切を將導したまふ、天人龍神の、共に供養する所なり、是の佛の滅後、法盡きなんと欲する時、一りの菩薩有り、常不輕と名く、時に諸の四衆、法に計著せり、不輕菩薩、其の所に往き到りて、之に語りて言はく、我汝を輕しめず、汝等道を行じて、皆當に作佛すべし、諸人聞き已りて、輕毀し罵詈せしに、不輕菩薩、能く之を忍受しき、其の罪畢へ已りて、命終の時に臨みて、此の經を聞くことを得て、六根清淨なり、神通力の故に壽命を增益して、復諸人の爲に廣く是の經を說く、諸の著法の衆、皆菩薩の教化成就して、佛道に住せしむることを蒙る、不輕命終して、無數の佛に値ひたてまつる、是の經を說くが故に、無量の福を得、漸く功德を具して、疾く佛道を成ず、彼の時の不輕は、則ち我が身是なり、時の四部の衆の、著法の者の、不輕の、汝當に作佛すべしと言ふを聞きしは、是の因緣を以つて、無數の佛に値ひたてまつる、此の會の菩薩、五百の衆并及に四部清信士女の、今我が前に於いて、法を聽く者是なり、我前世に於いて、是の諸人を勸めて、斯の經の、第一の法を聽受せしめ、開示して人を教へて、涅槃に住せしめ、世世に是の如

日其罪畢已等云云不輕菩薩ノ無量ノ謗法ノ者ニ罵詈打擲セラレシハ先業ノ所感ナルベシ何ニ況ヤ蓮今生ニ貧窮下賤ノ者ト生レ旃陀羅（漁者）ガ家ヨリ出タリ心コソ少シ法華經ヲ信ジタル樣ナレドモ身ハ人身ニ似テ畜身也魚鳥ヲ混丸シテ赤白二諦トセリ其中ニ識神ヲヤドス濁水ニ月